

南山城の寺院・都城

- | | | | |
|--------|------------|-------|--------|
| 1. 加茂町 | 恭仁宮跡の調査 | 奈良 康正 | P1～8 |
| 2. 笠置町 | 史跡名勝笠置山の調査 | 伊野 近富 | P9～16 |
| 3. 井手町 | 井手寺跡の調査 | 茨木 敏仁 | P17～24 |
| 4. 山城町 | 高麗寺跡の調査 | 中島 正 | P25～32 |

日時：平成19年3月10日（土）

場所：山城町総合文化センター

アスピアやましろ グリーンホール

主催 京 都 府 教 育 委 員 会
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
後援 山 城 町 教 育 委 員 会

加茂町 恭仁宮跡の調査

京都府教育庁指導部文化財保護課
技師 奈良康正

1. はじめに

京都府には、古代において恭仁京・長岡京・平安京の3つの都が造られました。

恭仁京はこの3つの都の中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12（740）年に、聖武天皇により造られた奈良時代の都です。現在の加茂町・山城町・木津町の3町にわたって広がっていたと考えられています。そして、その中心となるのが加茂町 瓶原に位置する「恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、様々な儀式などが執り行われた内裏や、政務や国家の儀式が行われた大極殿や朝堂院、さらには役人達が仕事を行った役所（官衙）など、国の

恭仁宮跡調査の歩み

○昭和32年7月1日	・中心地域が史跡山城国分寺跡に指定される。
○昭和48年度～昭和57年度（第1次10か年計画）	・昭和48年度には分布調査、地図作製、文献調査を実施。 ・昭和49年度から発掘調査を開始。 ・大極殿、大極殿院回廊、朝堂院区画施設、内裏区画施設の一部を確認。 ・山城国分寺跡の塔跡、南大門、東・南面築地塀の一部等を確認。
○昭和58年度～昭和62年度（第2次5か年計画）	・朝堂院西限や朝集殿院南門及び朝集殿院南限の塀跡、西方官衙域の掘立柱建物等を確認。 ・山城国分寺跡の北面築地などを確認。
○昭和63年～平成3年度（第3次計画）	・朝集殿院南門、宮南面大垣などを確認。 ・山城国分寺跡の西面築地を確認し、範囲が確定。
○平成4年度～平成8年度（第4次5か年計画）	・東西南北全ての大垣や側溝、西南隅大垣の基壇、宮東面南門などを確認。 ・宮の範囲が確定し、東西約560m、南北750mの規模が判明。
○平成9年度～現在（保存活用調査）	・内裏地区に併存する二つの区画（「内裏東地区」・「内裏西地区」）を確認。 ・大極殿の北東隣接地域で大型の掘立柱建物を確認。 ・大極殿院回廊東辺の礎石据え付け痕跡を確認。
○平成19年2月6日	・史跡地を追加指定し、「恭仁宮跡（山城国分寺跡）」に名称変更。

中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする一帯は、短い期間ながら国の首都となっていたのです。しかし、そのわずか4年後の天平16（744）年には、都は大阪の難波宮^{なにわのみや}へと移り、さらにその後再び奈良の平城京^{へいじょうきやう}へと戻されることとなりました。恭仁京は短い役目を終えた後、天平18（746）年に山背^{やましる}（山城）国分寺へと造り替えられました。

恭仁宮跡では、これまで中心部に造られた山城国分寺跡が、国指定史跡として保護されてきました。しかし、平成19年2月6日には史跡に追加指定され、宮域全域が保護の対象となりました。

2. これまでの調査で分かっていること

恭仁宮跡での発掘調査は、昭和48年度から京都府教育委員会が、そして昭和61年度からは加茂町教育委員会も一緒になって行っています。

これまでに大極殿や内裏の建物跡などがいくつか見つかり、宮の中がどのようなようになっていたのか少しずつですが分かってきました。宮域は東西におよそ560m、南北におよそ750mの大きさを広がり、背の高い土塀^{ついでい}（築地塀）で囲まれていたことも分かりました。東南隅付近では、出入り口の1つである東面南門^{とうめんなんもん}が見つかっています。

大極殿は宮の中心から少し北側に造られ、高さ1mの大きな土壇の上に築かれた東西が約45m、南北が約20mもある大きな建物でした。柱を大きな石材^{そせき}（礎石）の上に建てる礎石建物^{そせきたても}で、北西と南西の隅に使われた礎石は、当時のままの位置にあることが調査によって分かりました。また、大極殿の北東では、大きな掘立柱建物^{ほったてばしらたても}も見つかっています。東西が約43m、南北が約12mとなり、大極殿に次ぐ大きさの建物です。大極殿が完成した後には取り壊されてしまったと考えられます。

大極殿の北側には、東西に2つ並ぶ塀で囲まれた区画があることが分かり、これが内裏と考えられます。このような在り方は、他の都では見られない恭仁宮だけのものです。この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区^{だいにしちく}」・「内裏東地区^{だいにがしちく}」と呼んでいます。「内裏西地区」は、周りが全て板塀^{ほったてばしらべい}（掘立柱塀）で囲まれ、東西が約98m、南北が約128mの大きさでした。「内裏東地区」は東・西・南の三方が土塀（築地塀）、北側が板塀（掘立柱塀）で囲まれ、東西が約109m、南北が約139mとなり、「内裏西地区」よりも一回りほど大きく造られていることが分かりました。

朝堂院では、これまでに内側に建てられていた建物跡は見つかっていませんが、周りを

板塀（掘立柱塀）で囲んでいたことが分かり、南側に造られていた門（朝堂院南門と朝集殿院南門）が見つかっています。

3. 今年度の調査で分かったこと

今年度の調査は、大極殿の周りを囲んでいた施設（大極殿院回廊）を見つけることと、朝堂院を囲んでいた塀跡（掘立柱塀）と、内側に建てられていた建物跡（朝堂）を見つけることを目的に行いました。

第1調査地点（第2図1）

この調査地点は、大極殿の中心から西へおよそ80mの位置になります。大極殿の周りを囲んでいた施設（大極殿院回廊）を見つけることを目的に調査を行いました。

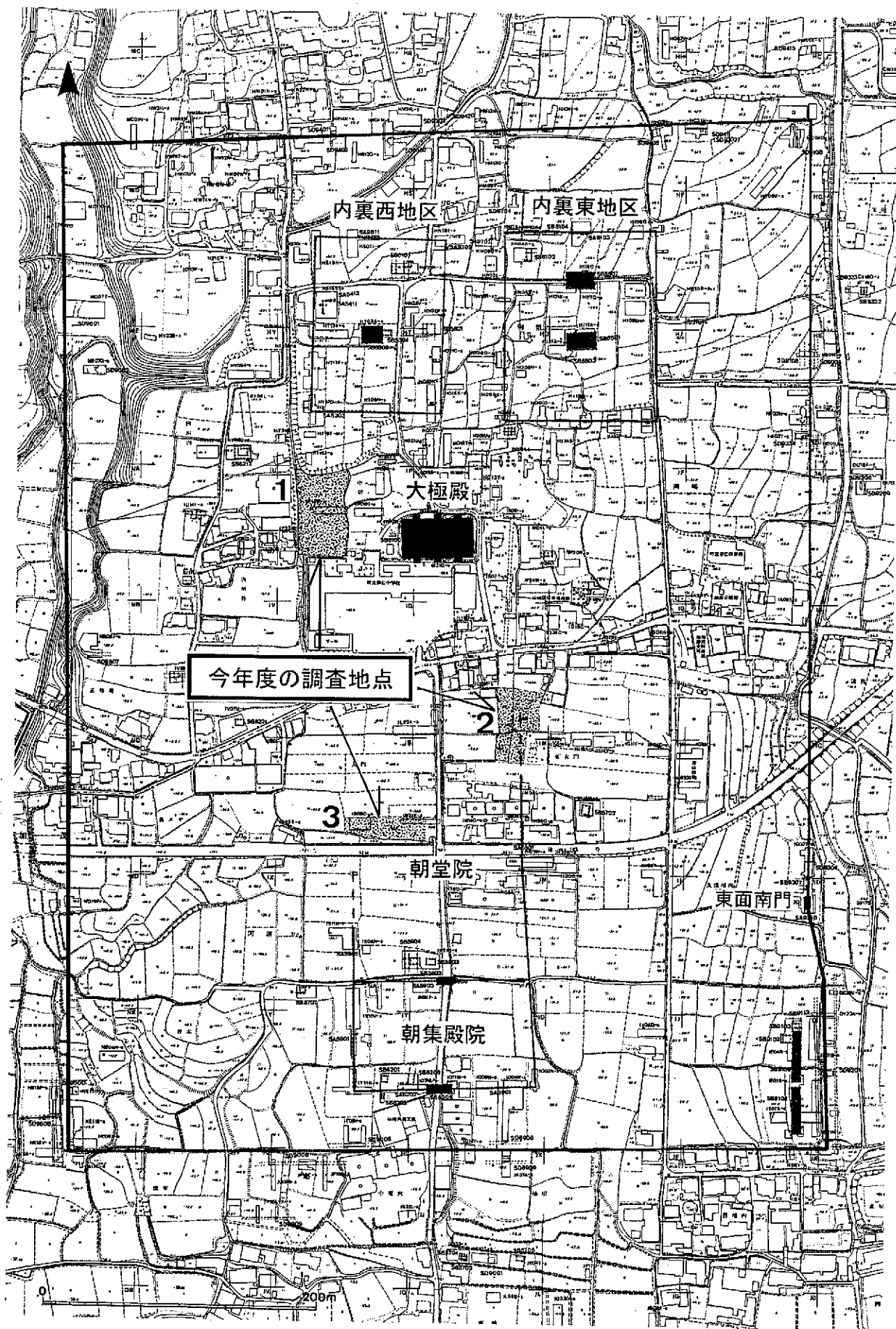
調査地では、固く締まった赤褐色の土が全体で確かめられ、これは恭仁宮の建設工事に伴う整地土と考えられます。また、調査地の東側は西側と比べて1.2m程低くなっていて、ここを埋めていた土からは平安時代から鎌倉時代の土器が見つかっています。この土の下からは、南北方向の溝1本と、直径1.2～1.5mを測る円形の穴が4つ見つかりました（第3図）。この穴は整地土から掘り込まれており、南北に約4.6m（15.5尺・1尺 \div 0.3m）間隔で一直線に並んでいました。それぞれの深さは10cm程が残っているだけでした。穴の中には、瓦の破片や拳大の石が埋まっていました。南北方向の溝は、0.3～1mの幅で掘られており、4つの穴と平行になるように並んでいました。溝を埋めた土からは、奈良時代の瓦と一緒に平安時代から鎌倉時代の土器が見つかりました。

この西から東へと1.2m程低くなる段差は、恭仁宮が造られた時から存在していたのかもしれませんが、恭仁宮や山背（山城）国分寺が当時の人々に忘れ去られてしまった後に、さらに大きく削られてしまったようです。

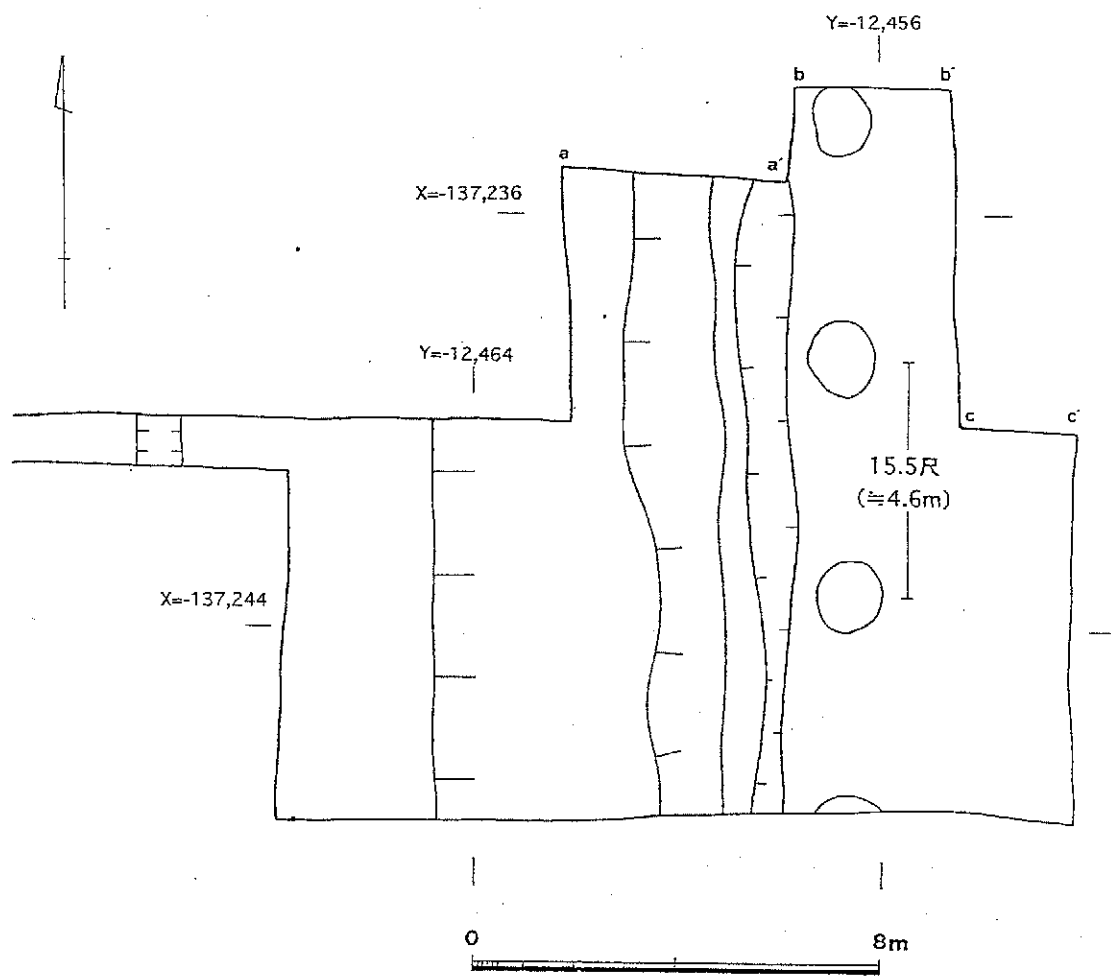
朝堂院を囲んでいた塀跡（掘立柱塀）と、その内側の建物跡（朝堂）を見つけることを目的に行った第2・3調査地点（第2図2-1～4、3）では、塀跡や建物跡は見つかりませんでした。これは、今回の調査地点には、元々何も造られていなかったためか、後世に水田や畑に造り替えられる際に、大きく削られてしまったためと考えられます。

4. おわりに

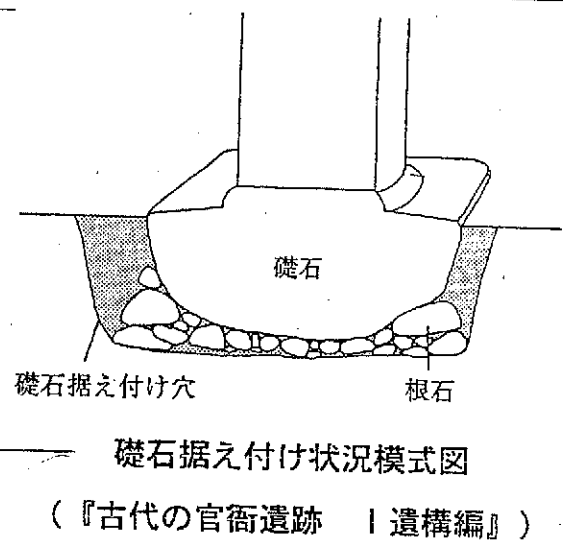
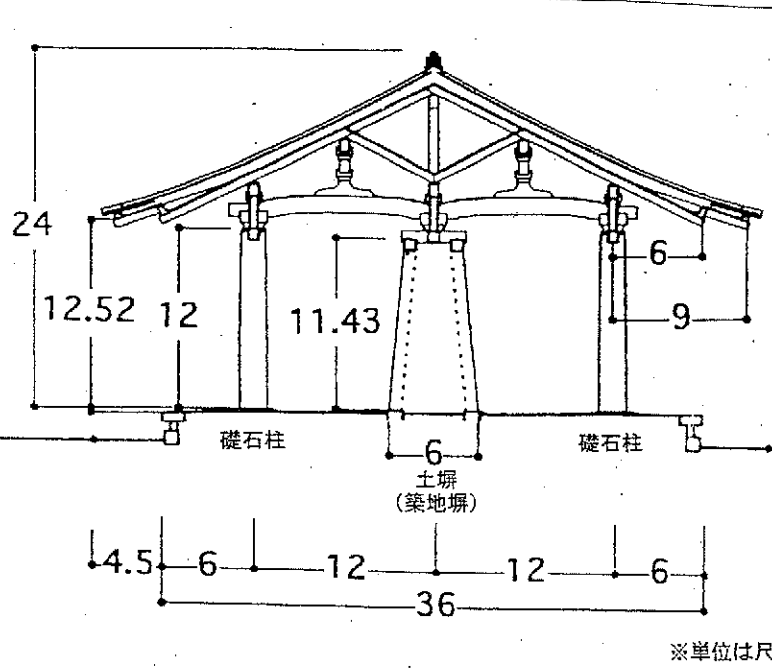
今回の発掘調査により分かったことは以下のとおりです。



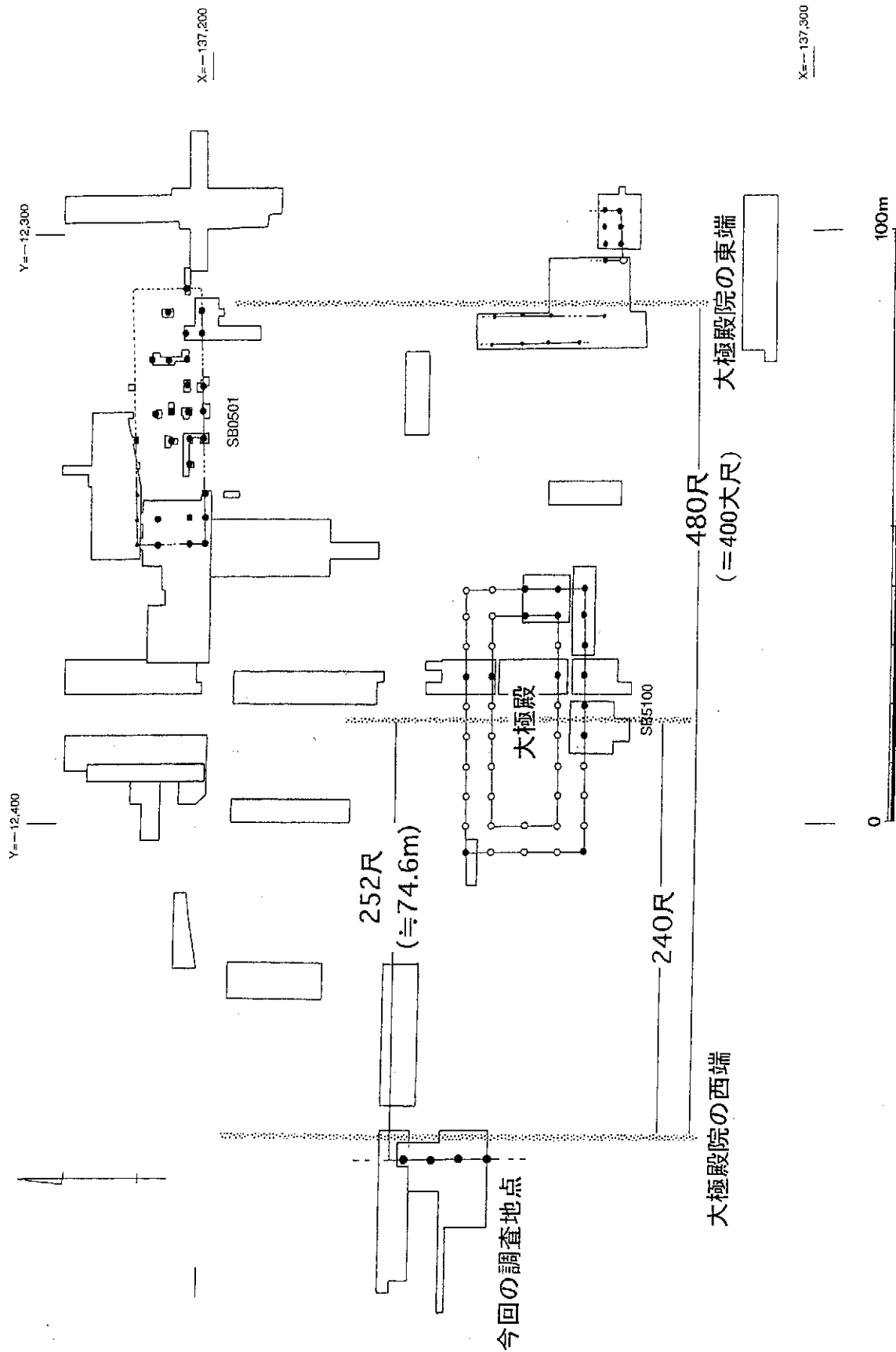
第1図 恭仁宮跡全体図 (S=1/4, 000)



第3図 第1調査地点で見つかったもの (S=1/150)



第4図 平城宮第1次大極殿院回廊梁間断面図 (S=1/150) (『奈良文化財研究所紀要 2004』一部改変)



第5図 大極殿院地区で見つかったもの (S=1/1,000)

笠置町 しせきめいしやう かさざやま 史跡名勝笠置山の調査

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

次席総括調査員 伊野近富

1. はじめに

今回の発表は笠置町の依頼を受けて、史跡名勝指定地内の遺構・遺物の内容を確認することを目的として実施した試掘調査の成果である。

歴史的環境

笠置山は地理上、奈良と京都、および三重や滋賀とを結ぶ物流の中継地点に当たり、それは、各種情報のネットワークの要の地でもあった。

笠置山は伝説によれば7世紀末に寺が開創され、奈良時代には磨崖仏まがいはつが作られたらしい。平安時代には弥勒信仰みろくしんこうに伴う修験道しゆげんどうの霊地として、史上にしばしば登場する。特に、御堂みどう関白藤原道長かんぱくふじわらのみちながの参詣さんけいは有名である。

平安時代末期に興福寺の僧である貞慶じやうけい（解脱上人げだつしょうにん、1155～1213）が、ここに隠遁し、大般若経600巻を納置させる六角経台1基と板葺き六角三間の精舎しょうじゃいちやう一字（般若台）を完成させる。その後、解脱上人を慕って多くの僧が移り住み、東大寺の僧宗性そうしやう（1202～1278）が入山した後は、東大寺の系統に入り、多くの堂宇どううが建てられたという。

元弘元年（1331）8月27日に、後醍醐天皇ごたいごは東大寺の別当聖尋べつどうしょうじんを頼って行幸し、笠置山本堂ほんどうを行在所とする。鎌倉幕府はこれを倒幕活動と断定し、大軍を向かわせ、約1ヶ月の攻防の末、9月28日に笠置寺はことごとく焼き払われ、千手堂せんじゆどう、六角堂ろっかくどう、大湯屋おのおゆやのみが残ったという（元弘の乱げんこうのらん）。

2. 調査成果

今回の調査は笠置山を貫く東海自然歩道の両側に15箇所の特レンチを設定して行われた試掘調査である。総延長は400mに及ぶ。1～3特レンチは調査地南部。4～9特レンチは調査地中央部。10～15特レンチは調査地北西部で笠置寺に近い地点に位置する。

1特レンチでは、布目瓦ぬのめがわらや瓦器椀がきわんが出土したものの、遺構は確認されなかった。

2・3特レンチは東海自然歩道の両側に設定した。ここには、土塁どるいと空堀からほりとが現存して

2・3トレンチは東海自然歩道の両側に設定した。ここには、土塁と空堀とが現存している、山城の出入り口である虎口部分に相当する。2トレンチの土塁は上部が削平されていたものの、北斜面は残存していた。古瀬戸平碗が出土したことから戦国期に使用されたことが判明した。3トレンチの土塁は上部が削平されていた。空堀は完存しており、まず、幅4 m、深さ2.5 mの大きな空堀が掘削され、一時期使用されたものの1 mほど埋め立てられたようである。そして、戦国期に当初の半分の幅で掘り直されたようである。

4・5トレンチは丘陵平坦面に設定した平坦面は山を削り人工的に造成されたことが判明した。4トレンチでは五輪塔の一部（火輪）が出土した。墓地として使用されたほか、周辺で完形品を含む土師器皿が多数出土し、土釜もあることから、生活場所として機能していたようである。時期は鎌倉時代後期から南北朝期である。

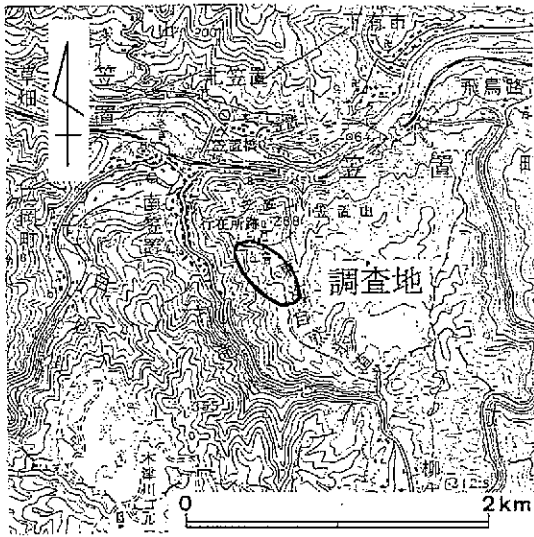
6～8トレンチは谷部に設定した。6・7トレンチでは、下層で焼土面を確認した。焼土面には石畳状の石があり、横は硬くたたき締められた状態で、おそらく、建物の土壇と考えられる。時期は鎌倉時代後期から南北朝期である。

9トレンチは谷部屈折点に設定した。東西方向の土塁の両側は空堀であったことが判明した。城の防御施設と考えられる。下層で焼土層を確認した。

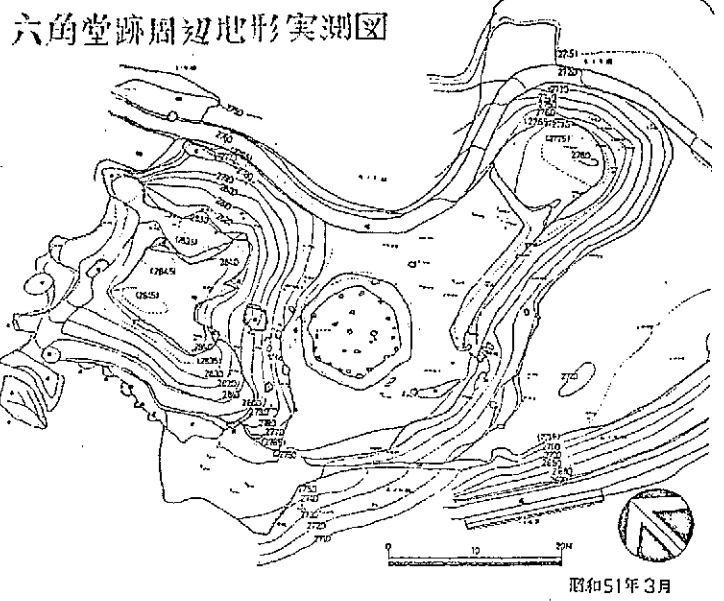
11・15トレンチは笠置寺のある主丘陵から延びた2つの尾根上に設定した。それぞれに礎石建物があつたことが判明した。鎌倉時代後期に整地した後、建設したようである。建物と同方向の溝も確認した。なお、建物や溝の方向は尾根の方向とは相違しており、丘陵上方にある六角堂などの笠置寺主要施設と同方位である。

3. おわりに

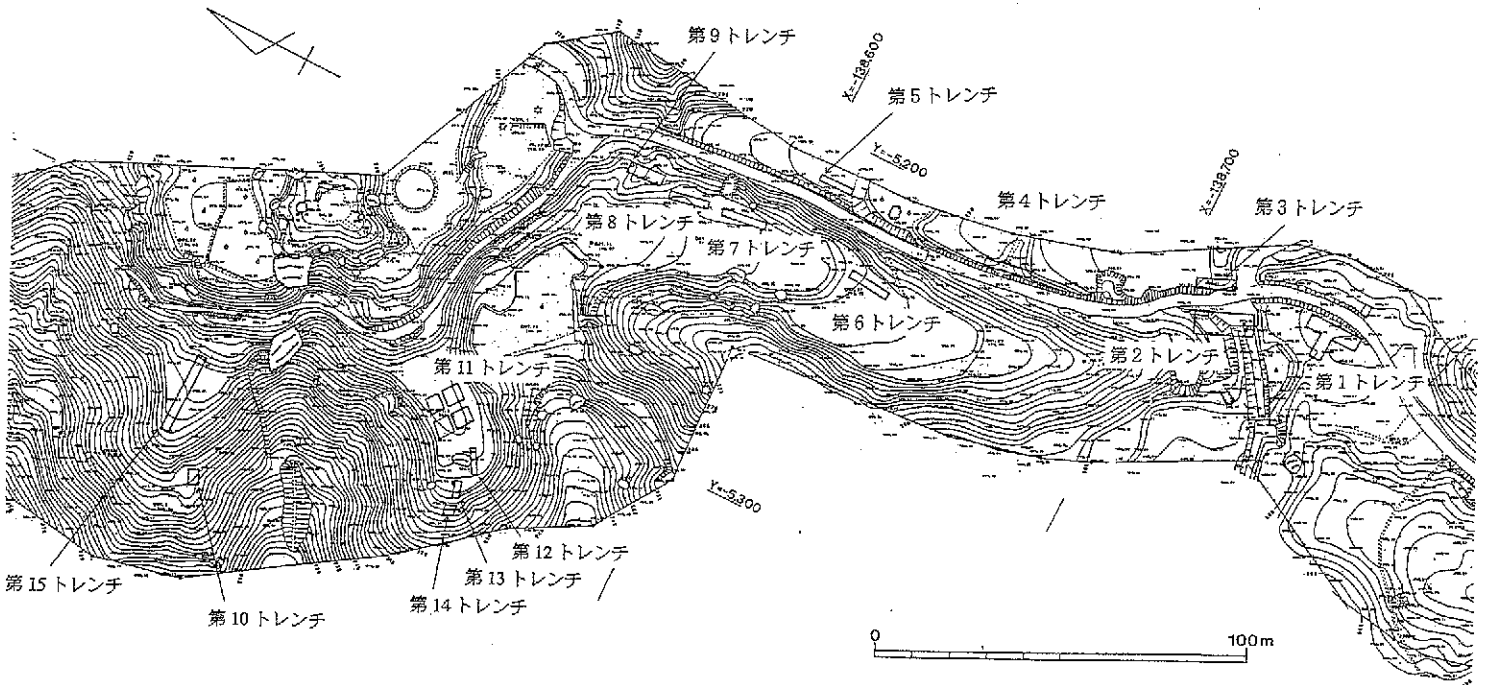
今回の調査成果によれば、鎌倉時代から南北朝期に大規模な防御施設が存在したと、六角堂を意識した建物があつたことがわかつた。また鎌倉時代から南北朝期の遺物を包含する焼土層が確認されたことから、おそらく元弘の乱に際して大火があつたことも判明した。不明な点が多い山岳寺院の使用状況の一端が判明したことが大きな成果である。



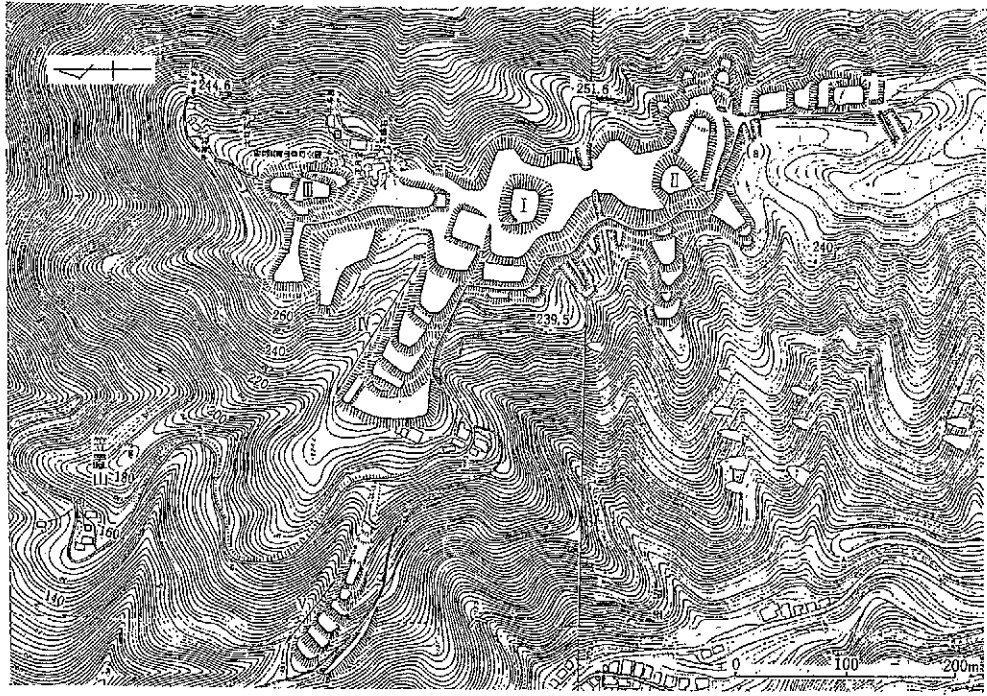
第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 奈良)



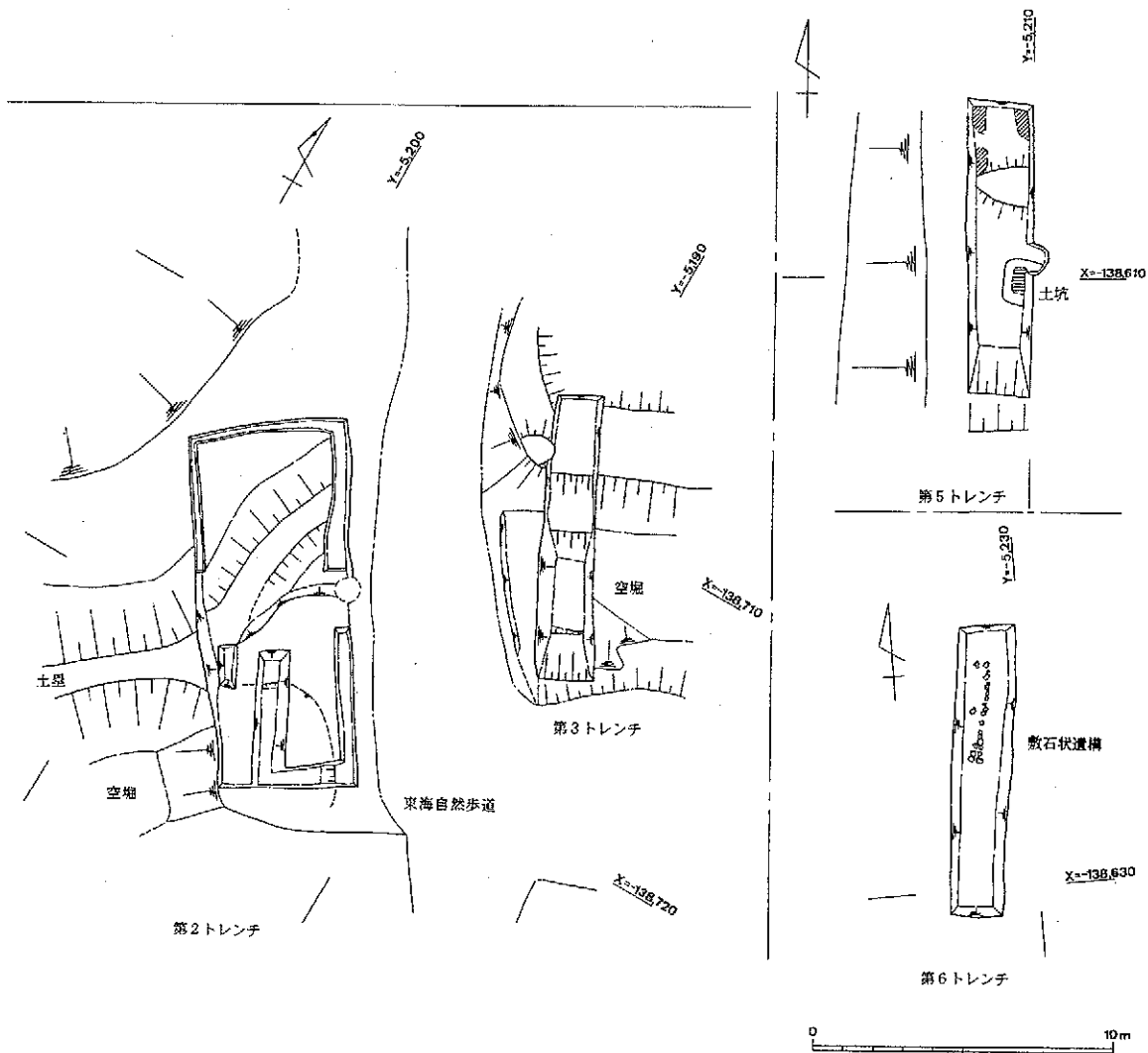
第2図 六角堂跡周辺地形測量図



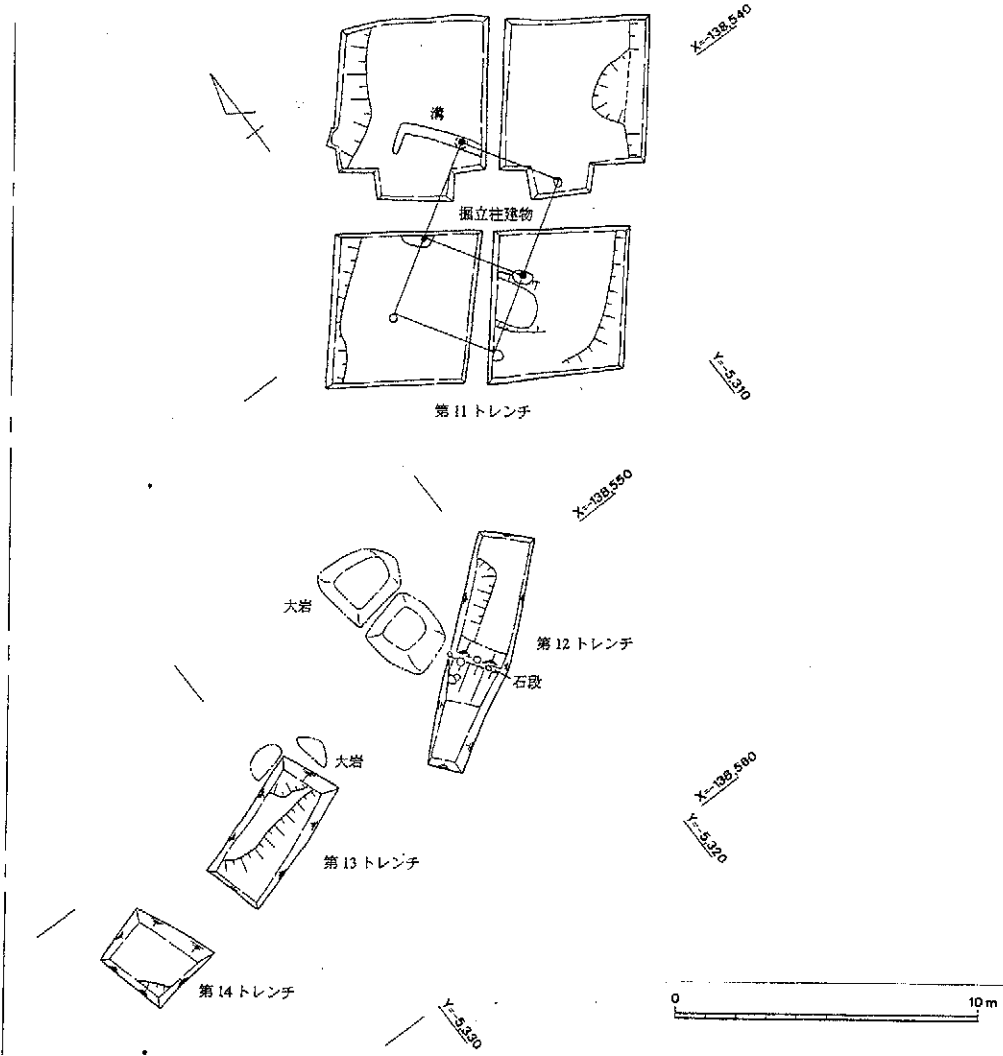
第3図 トレンチ配置図



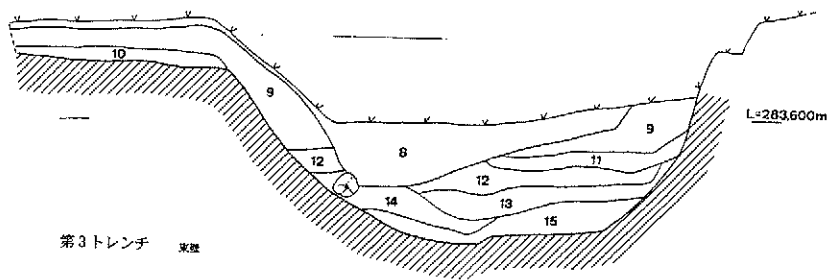
第4図 笠置城縄張り図 (中井均氏作図)



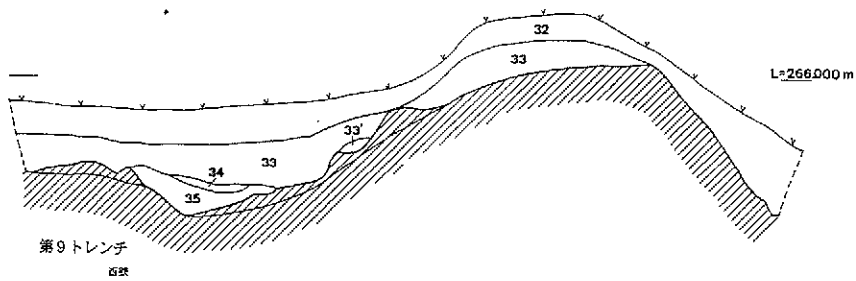
第5図 第2・3・5・6トレンチ平面図



第6図 第11~14 トレンチ平面図

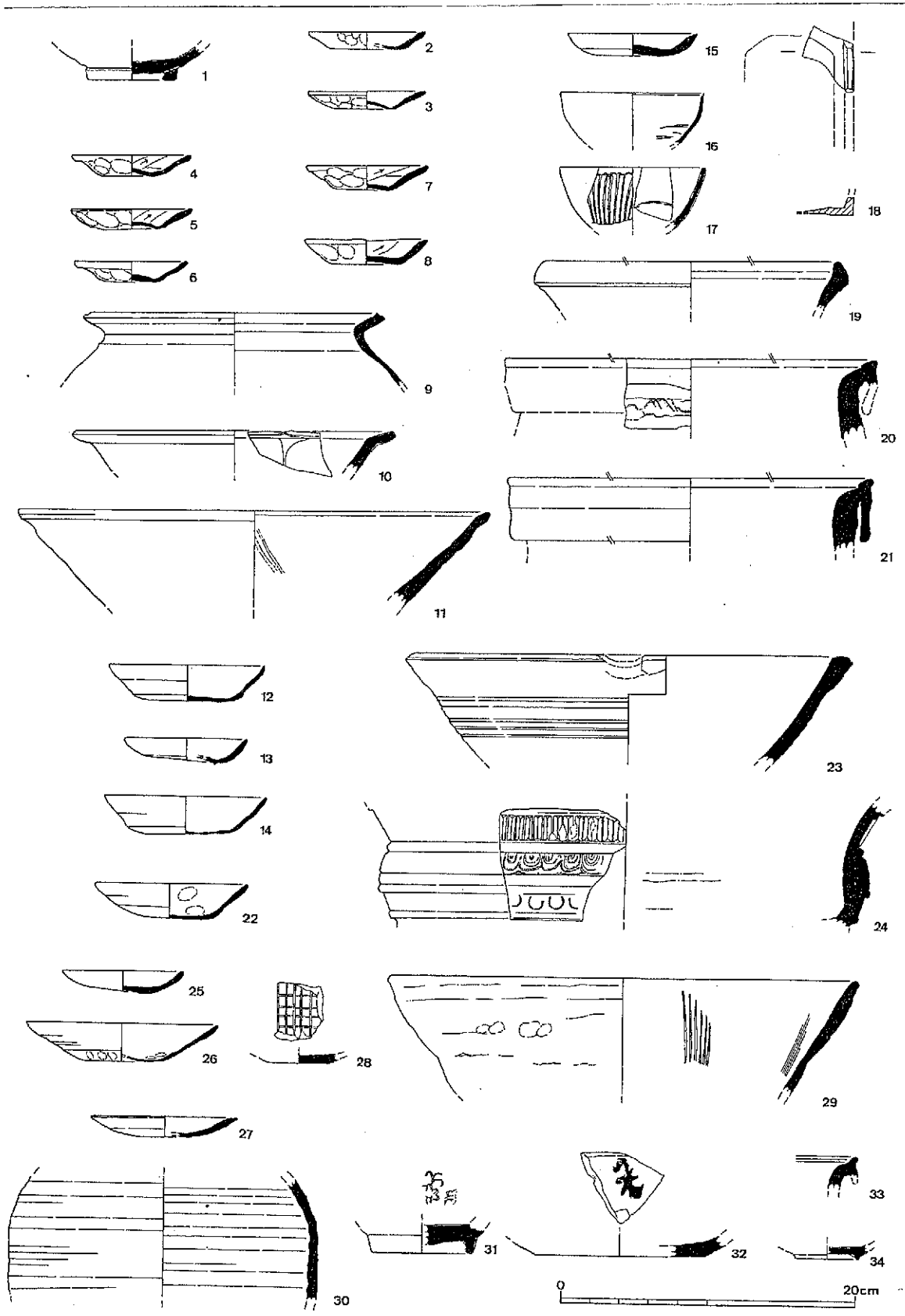


第7図 第4 トレンチ断面図 (堀)



第8図 第9 トレンチ断面図 (土塁)





第9図 出土遺物実測図



第10図 笠置寺絵図
 (笠置町教育委員会編『笠置山—その歴史と文化—』から引用)

笠置山関係資料

時代			
弥生時代	有樋式石剣	笠置寺正月堂跡出土	『府概要報告』1971
奈良時代	笠置寺開創の話	天智天皇の皇子が笠置山で遊獵した際、鹿を追って断崖で進退きわまったが山神の擁護を祈念して危険から免れた。後日、その地に弥勒石仏を本尊として創建	『今昔物語』巻11
	笠置寺開創の話	天智天皇第13皇子が建立	『東大寺要録』
	笠置寺開創の話	白鳳11年(682)の草創	『笠置寺縁起』
	磨崖仏(まがいぶつ)	薬師・文殊・虚空蔵の石仏群	
平安時代	弥勒信仰	弥勒信仰にともなう修験道の霊場として吉野金峰山と並び称される	
	笠置詣で	寛弘4年(1007)、御堂関白藤原道長参詣 安元2年(1176)、後白河上皇行幸	『御堂関白記』 『笠置寺縁起』
	笠置寺の評判 経塚	寺は・壺坂、笠置 虚空蔵石の下から遺物多数発見	『枕草子』 『府概要報告』1971
鎌倉時代	寺の隆盛	銅製・土製経筒、銅製六器、白磁合子 建久3年(1192)、興福寺の僧貞慶(解脱上人)がここに隠遁 建久6年(1195)、大般若経600巻を納置する六角経台1基と板葺き六角三間の精舎一宇(般若台){六角堂跡}、および葺き五間一面僧坊一宇{僧坊跡}完成 建久7年(1196)、東大寺大勧進俊乗坊重源がこの般若台に銅鐘を寄進{鐘楼跡}。鐘は重文 建久9年(1198)貞慶が木造瓦葺十三重塔建立 東大寺の僧宗性が入山し、『弥勒如来感應抄』をはじめ多くの著述を笠置寺東谷房・福城院南堂・般若院でおこなう。(1230~1270年)	『玉葉』 『弥勒如来感應抄』 『南無阿弥陀仏作善集』 東大寺所蔵文書 宗性上人年譜
	元弘の乱	元弘元年8月27日(1331)、後醍醐天皇は東大寺別当聖尋を頼って行幸し、笠置寺本堂を行在所とする。当寺の衆徒をはじめ、近国の兵共集まる。 9月兵火でことごとく焼き払われ、千手堂、六角堂、大湯屋が残ったのみ	『太平記』 『笠置寺縁起』
南北朝期	本堂再建	永徳元年(1381)本堂再建	『笠置寺縁起』
室町時代	本堂炎上	応永5年(1398)本堂炎上 現在の正月堂(本堂)、毘沙門堂、大師堂は文明年間の造営とされる。	『笠置寺縁起』 『京都府の地名』
戦国期		山城国守護細川晴元のもと 山城国守護代木沢長政が山城として使用。 天文10年(1541)11月26日、伊賀衆が攻めてきて少々の坊舎放火。同28日合戦あり。伊賀衆退散。	『多聞院日記』
江戸時代		元和5年(1619)以来伊勢国津藩領藩主藤堂氏により堂宇が建造される。 元禄4年(1691)前後には不動院、知足院、多聞院、文殊院、福寿院の五坊あり、宗派は真言宗。	『京都府の地名』
地名		下の堂、上の堂、曹公廟、護摩堂、食堂、宝蔵坊、下之坊、上之坊、弥勒院、岩本坊、知足院、文殊院、多聞坊、念仏寺、般若台、長蓮坊、桜院、成就院、東大門、東福寺、安楽寺など	『京都府の地名』

第1表 笠置山関係資料

井手町 井手寺跡の調査

井手町教育委員会
文化財技師 茨木敏仁

1. はじめに

上井手区と高月区一帯に広がる遺物散布地である栢ノ木遺跡は、玉川右岸の段丘崖から、上井手の台地にかけて東西約800m南北約500mの範囲を埋蔵文化財包蔵地としている。その中央部に位置する井手寺跡周辺からは、奈良時代の瓦・須恵器・土師器等が採取されていることが知られていたが、近年まで発掘調査はなされておらず、具体的内容は不明であった。

井手町では町内の遺跡を保護するための資料収集を目的に、平成14年度から範囲・内容確認の調査を実施し、継続中である。第1期として、平成15年度から18年度までの4ヵ年計画で範囲内容確認調査を実施した。

第1期調査の最終年になる本年度は、平成15～17年度調査の成果を参考にし、その南側と、未調査の府道北側で実施した。既調査で検出された井手寺跡関連遺構の広がりや繋がりを探り、新たな建物遺構の検出を主とした。

2. 昨年度までの調査の経過

井手寺跡は、京都府綴喜郡井手町大字井手小字東高月、西高月、栢ノ木に所在する。南山城を北流する木津川右岸の河岸段丘中位上面、標高61～63mに位置し、遺跡からは南山城盆地が一望できる。遺跡の南側にある傾斜地には古墳時代後期の石室墳も複数確認されている。井手寺は、奈良時代天平期の聖武天皇治下で活躍した橘諸兄が創建した橘氏の氏寺と考えられている。しかしながら、藤原氏の権力中枢への復活と橘氏の勢力後退などもあいまって、その存在は知られるものの、具体的な位置や規模、伽藍配置などは不明のままであった。府道と東井手線に面する井手寺跡記念碑には、5個の礎石が、その南側傾斜地の上には4個の礎石が集められている。これら9個の礎石は奈良時代の様式であることが確認されている。平成13年度、道路拡幅に伴い初めて本格的な調査がなされ、15年度

匹敵する建物跡と施釉垂木先瓦片せゆうたるきざさかわらが4点出土し、その寺院であろう建物の存在が発掘調査でも確認された。

平成16年度は、伽藍内部で南北方向に20～40cmの石で造作された石敷きと、その東側で多量の瓦が廃棄された溝が検出され、その中から当時の彩色を鮮やかに残す施釉垂木先瓦片が多数出土した。出土した瓦は奈良時代が中心で、一部平安期の瓦もみられた。平城宮式や恭仁宮で用いられた瓦と共通する型式が多く含まれており、聖武天皇期の色合いをうかがわせるものであった。

平成17年度は、南北方向の石敷き東側で、東西5間・南北4間の建物柱跡ねいしあと（根石跡）が検出された。その東側には瓦落ちかわらおがあり多量の瓦が一面に散乱していた。現耕作地の地形的な関係から、削平が激しく建物の基壇きだん等は痕跡を留めていなかった。

平成18年度は、府道の北側が未調査である点と、この周辺に瓦の散布が見られることから、この部分に調査対象地を設定し、第1トレンチとした。また、第2トレンチを、昨年度東西方向石敷き先に建物の遺構が確認されたトレンチ北側に設定した。さらに、第3トレンチとして、南北方向石敷きの延長線上の南延長地点にT字形でトレンチを設定した。

第1トレンチでは、建物2棟の礎石こんろうと軒廊、これらの建物の周囲を廻る雨落ち溝あまおみぞが良好な状態で検出した。第2トレンチでは、2箇所ふたところの柱跡痕跡を確認し、掘削すると根石ねいしが検出された。表土層で裏面に刻印くわいんを持つ瓦片が1点出土した。第3トレンチでは、東西方向の浅い溝状の窪みに敷設された石列を確認し、北の石垣との間で奈良期の瓦が出土した。しかしながら、石の並びが整然とせず、埋土から近現代の造作と判断した。南北方向には薄い包含層ほうがんそうが検出されたが、遺構面は検出されなかった。

3. まとめ

第1トレンチで検出した遺構は、S B 501・502、S D 503、S K 504である。この調査区は、昨年度までの調査地点から東に約40m、北に約50m離れた位置にある。

S B 501は東西7間・南北2間の建物である。建物の周囲には底面と両側面を石で造作した雨落ち溝が取り囲む。建物中心部の北面と南面にはそれぞれ南北方向に延びる軒廊が取り付き、特に北側の軒廊は、さらに北に存在する建物S B 502へと繋がる。南側の軒廊部分は削平が多く礎石も1石しか検出できなかったが、雨落ち溝が残り、さらに南に延伸していた。南側にも建物が存在する可能性がある。雨落ち溝は、建物の礎石部分の中心か

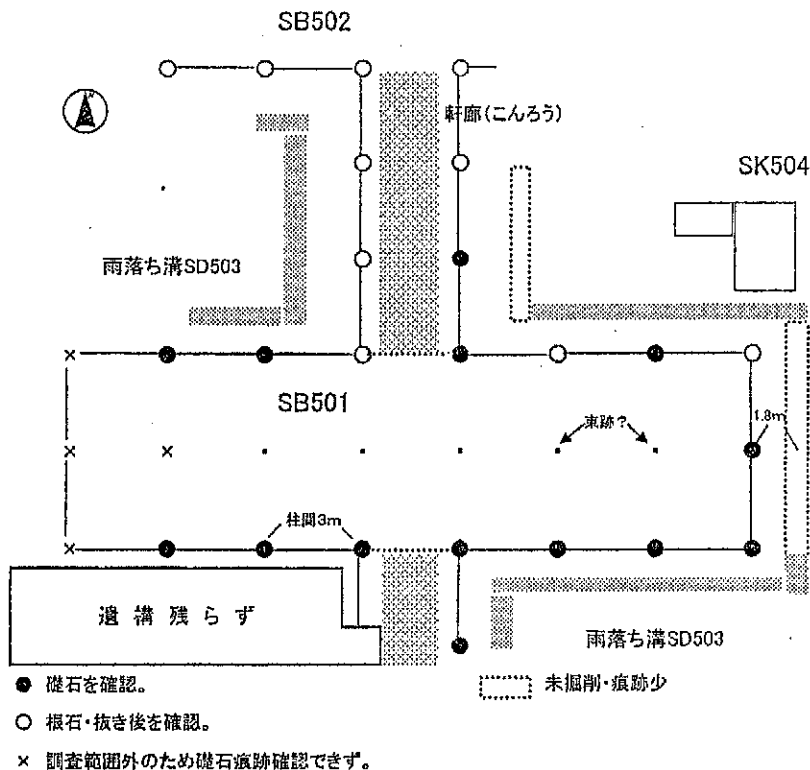
ら雨落ち溝中心まで約1.8mを測り、この間隔を保ちながら周囲を取り囲んでいた。地山は北に向かい緩やかに傾斜して上っており、S B 501の礎石南列と北列ではわずかであるが標高差があった。雨落ち溝も排水が北から南へと流れるよう傾斜があり、S B 501東南角で検出された底面と、中央南で検出された底面では中央部の方が低かった。

S B 501東北角北側で検出された土坑S K 504からは、昨年度までの調査でほとんど出土しなかった土師器杯皿片や甕片が多く出土した。このことは、府道南側の建物との性格の相違を示すと考えられる。出土した瓦類については、府道南側の調査地と比較すると出土量が少なく、平瓦も縦に割れて横幅を残すものはなかった。軒瓦も量が少なく、軒丸瓦では初めて小型品が出土した。建物の規模や出土瓦から、S B 501は総瓦葺ではなく、屋根の一部に瓦が用いられ桧皮葺等であったと考えられる。以上のことからS B 501・502については、僧房や食堂の可能性が示唆されるが、現在までの調査成果では確定できず、今後の調査をまって慎重に検討したい。

第2トレンチでは、礎石建ち建物の柱の痕跡（根石）が、2か所確認された。これは、昨年度の調査で確認されていた大型の建物（S B 401）の東側延長部に相当する。この建物跡は、基壇の上に構築されていたものと考えられるが、後の時代に削られるなどして、礎石や基壇部分は残されていなかった。ただし、この場所が耕作地として造成される際に、基壇化粧に用いられたとみられる凝灰岩や瓦片が掘り出された形跡が認められた。

第2トレンチの表土から凹面に刻印を残す瓦片が出土した。破片の形態から丸瓦の一部と思われる。同じ文字を持つ瓦片は、昨年度S B 401東側の瓦落ちで出土した瓦群からも出土している。このことから、S B 401の瓦に刻印を持つ瓦が使用されたと考えられる。この刻印の文字については同じ文字の刻印を持つ瓦が平城京第1次大極殿周辺で出土している。恭仁京を新たに造る際に壊され、その部材が恭仁京に持ち込まれた場所である。井手寺跡ではこれまでも、平城京・恭仁宮と共通する瓦片が出土しており、今回の刻印を持つ瓦片の出土とあわせて、創建時期特定の手がかりになるものと考えられる。

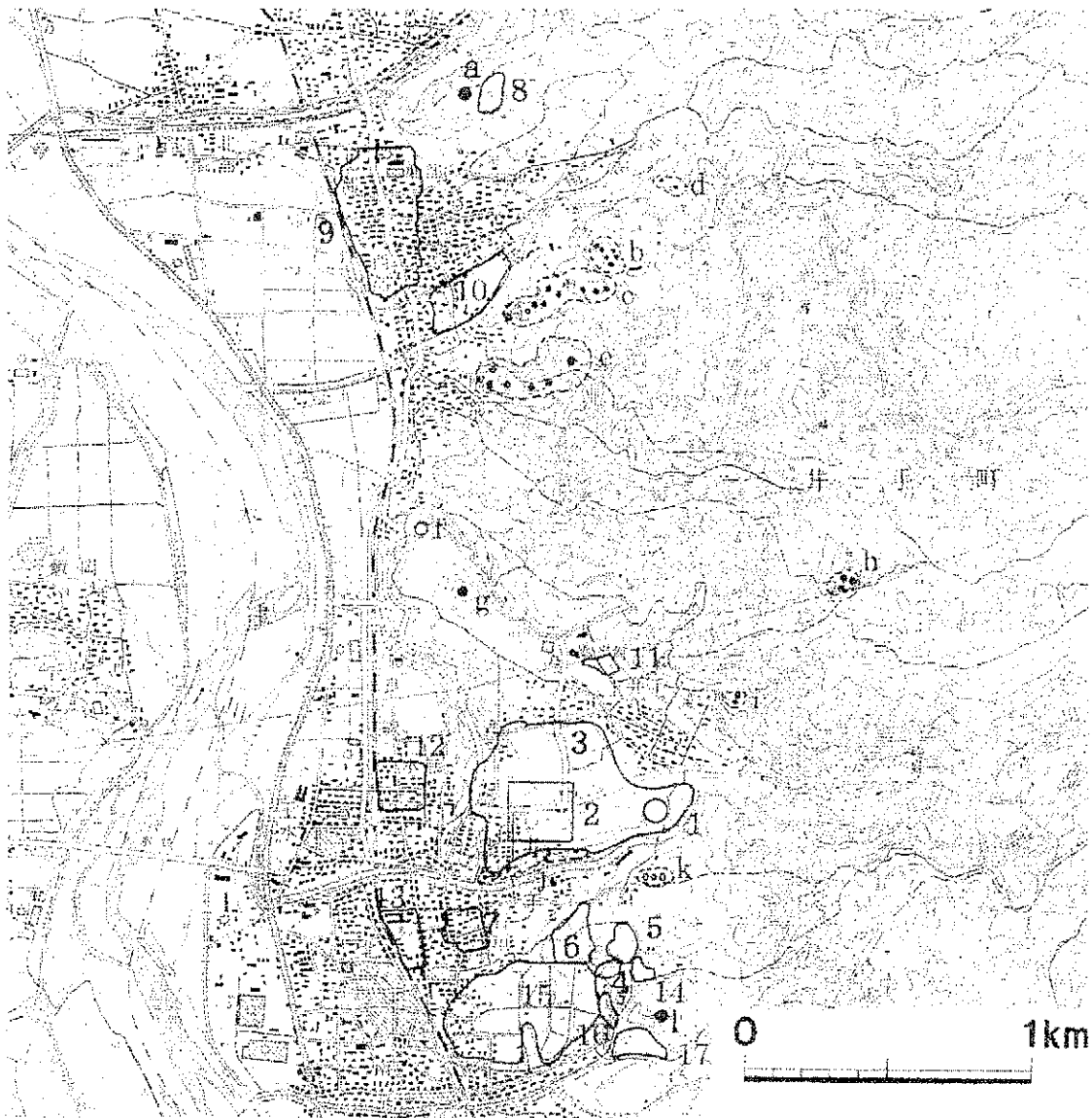
15年度から本年度調査までの成果としては、井手寺の伽藍を構成していた建物の遺構が、府道南側だけではなく、北側のこれまでの調査地と離れた場所でも新たに検出され、伽藍内部の建物群の規模や、想定されてきた寺域を見直す資料が得られたことである。さらに、創建時期について、出土遺物や規模から、橘諸兄が深く係っていたことがより濃厚となった。井手寺が当時山城地域の寺院の中でもかなり大規模なことや、造作の精緻さが証明されつつあり、今後の調査により、寺域確定と伽藍配置の解明に近づくことを期待したい。



第1図 第1トレンチ検出遺構平面模式図

橘諸兄 関連略年表

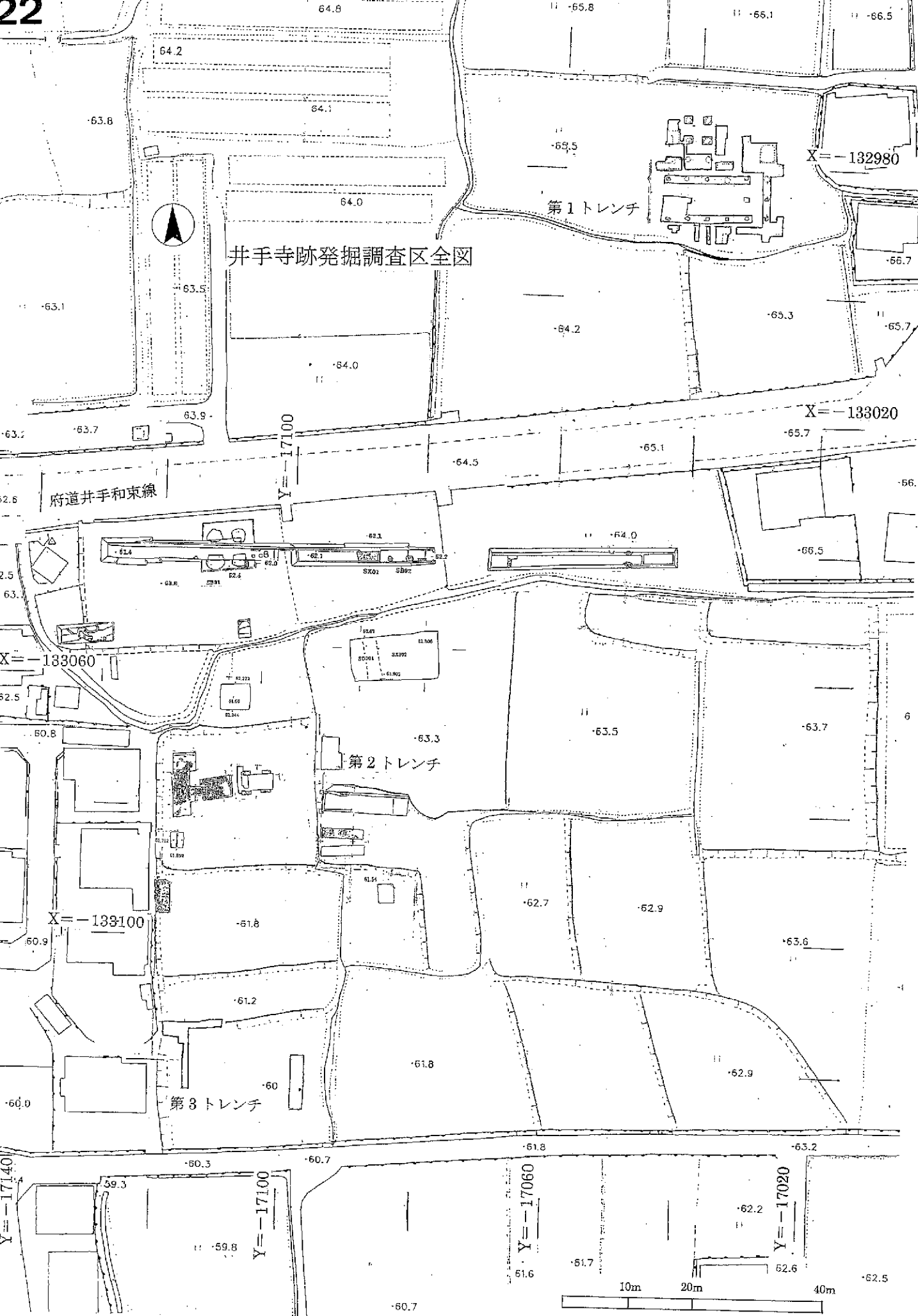
西暦(年号)	おもなできごと
710(和銅三)年	平城京遷都。
724(神亀元)年	首皇子、即位(聖武天皇)。長屋王、左大臣就任。
729(天平元)年	長屋王の変。光明子立后。
736(天平八)年	葛城王が母県犬養橘三千代の姓を嗣いで橘宿祢諸兄と改名。 天然痘の流行。藤原四兄弟相次いで死去。
737(天平九)年	橘諸兄、大納言に就任。
738(天平十)年	諸兄など伊勢に派遣され神宝が奉獻される。 諸兄、右大臣に就任。
739(天平十一)年	聖武天皇、二回にわたり壘原離宮行幸。
740(天平十二)年	藤原広嗣の乱 聖武天皇、伊勢(関東)行幸。 恭仁宮造営開始。
741(天平十三)年	聖武、恭仁宮で元日朝賀の儀式を行う。 国分寺・国分尼寺建立の詔。
742(天平十四)年	聖武、紫香樂宮へ行幸(4回)。 紫香樂宮にて大仏造立詔を宣言。
743(天平十五)年	恭仁宮の大極殿で朝賀の儀式を行う。 橘諸兄、左大臣に昇進。 恭仁宮の造営を中止。
744(天平十六)年	難波宮行幸(後期難波宮遷都)。 聖武天皇、橘諸兄を難波宮留守に任じ、紫香樂宮行幸。
745(天平十七)年	紫香樂宮を「新京」とする(紫香樂宮遷都)。 聖武天皇、紫香樂宮を立ち恭仁宮を経て平城宮に行幸(平城遷都)。 聖武天皇、難波宮に行幸。 橘諸兄のブレンであった僧玄、筑紫観世音寺に左遷。
747(天平十九)年	大仏鑄造を開始。
748(天平二十年)年	聖武天皇、行基から菩薩戒を受ける。
749(天平勝宝元)年	安倍内親王即位(孝謙天皇)。 藤原仲麻呂、紫微中台の長官(紫微令)に着任。
752(天平勝宝四)年	大仏開眼供養会。 井手町多賀にゆかりがあった僧良弁が東大寺別当に就任。
756(天平勝宝八)歳	橘諸兄、引退。
757(天平宝字元)年	聖武太上天皇、行幸先の難波宮にて没。 橘奈良麻呂の変。 橘諸兄、没(74歳)。



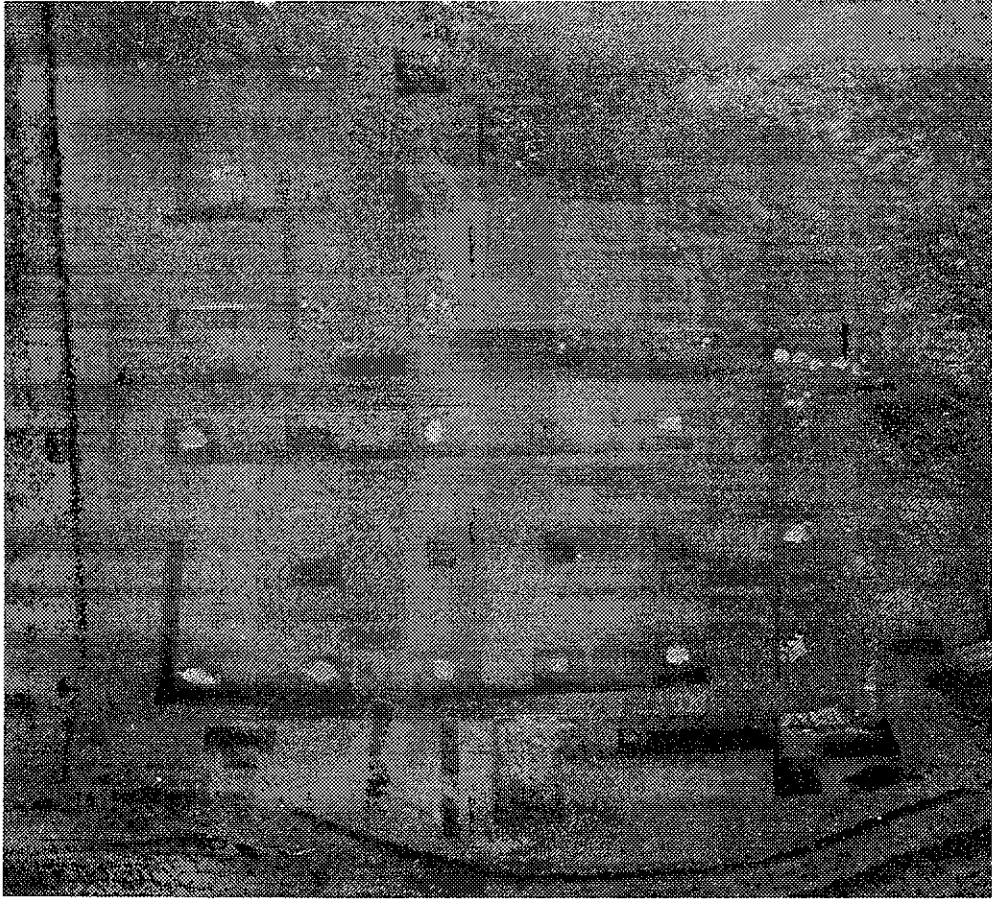
第2図 調査地位置図

井手町の主要遺跡

- | | | | | |
|----------|---------|---------|----------|----------|
| 1 石橋瓦窯跡 | 2 井手寺跡 | 3 栢ノ木遺跡 | 4 岡田池瓦窯跡 | 5 岡田遺跡 |
| 6 塚本遺跡 | 7 宮ノ本遺跡 | 8 東北山遺跡 | 9 多賀遺跡 | 10 判ノ池遺跡 |
| 11 上井手遺跡 | 12 水無遺跡 | 13 野神遺跡 | 14 南開遺跡 | 15 植田遺跡 |
| 16 上赤田遺跡 | 17 鳥休遺跡 | | | |
- a 茶臼塚古墳 b 高神社古墳群 c 天王山古墳群 d 清水奥古墳群 e 上堂古墳群
 f 平山古墳 g 北大塚古墳 h 小玉岩古墳群 i 玉津岡神社裏古墳群 j 高月古墳群
 k 弥勒古墳群 l 南大塚古墳



第3図 調査地点位置図



第1トレンチ全景写真1 第1トレンチ全景（上が北）



写真2 建物501の北西雨落溝（北から）



写真3 建物501の南面雨落溝（西から）

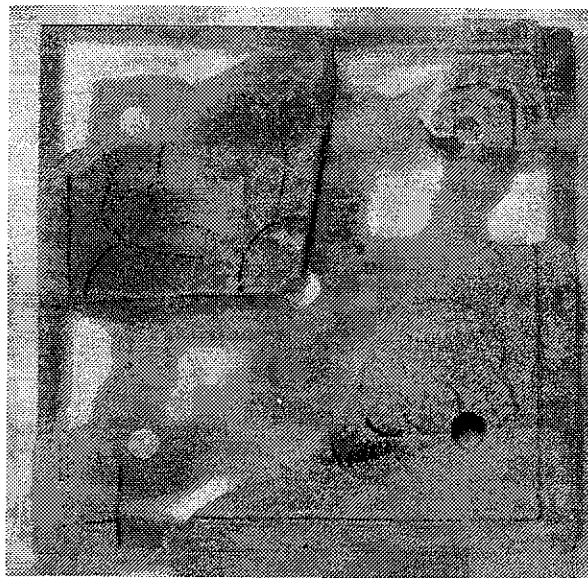


写真4 施釉線刻垂木瓦（平成17年度）



井手寺跡出土軒瓦

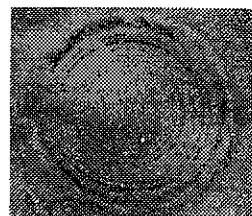
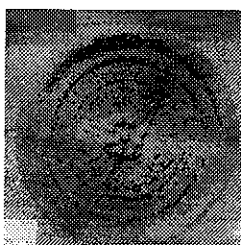


写真5 軒丸瓦・軒平瓦

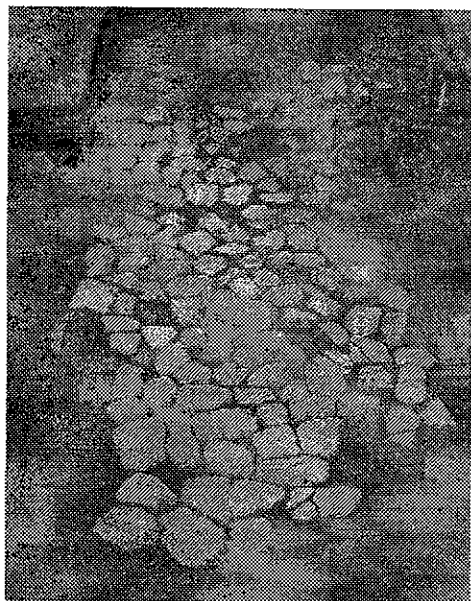


写真6 南北方向の石敷き（平成16年度）

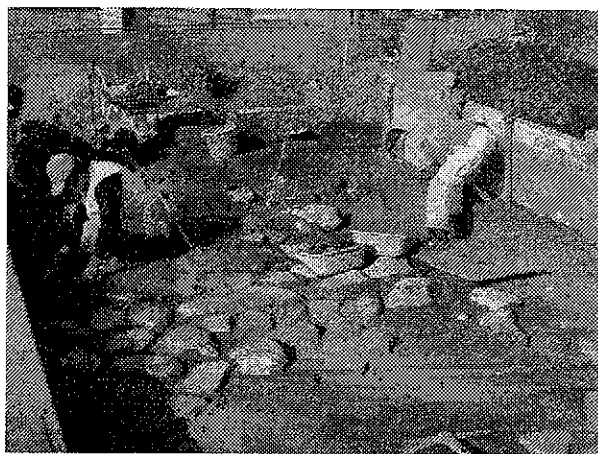


写真7 東西方向の石敷き（平成17年度）

山城町 高麗寺跡の調査

山城町教育委員会事務局
教育次長補佐 中島 正

1. はじめに

この発掘調査は、高麗寺跡(飛鳥時代創建, 国史跡)の史跡整備に伴う第3期調査の2年目にあたり、昭和59～63年(1984～88)度に山城町が実施した寺域の範囲確認調査(第Ⅱ期調査)から数えて、高麗寺跡の第7次調査となります。なお、昭和13年(1938)にも2度の発掘調査(第Ⅰ期調査)が行われ、その成果を受けて昭和15年(1940)8月30日、回廊に囲まれた主要堂宇を含む伽藍の一部が国の史跡となりました。その後、山城町では、過去の発掘調査や史跡等公有化事業(平成8～13年(1986～2001年)度)、史跡高麗寺跡保存活用計画策定事業(平成10～13年(1988～2001年)度)等により、今日まで史跡の保全に努めてきました。今回の調査は、ようやく緒についた高麗寺跡の史跡整備を行う上での基礎資料の収集を目的としており、今まで未確認だった南門跡と南辺築地跡の規模等内容の確認を行っています。

2. 調査の概要

高麗寺の主要堂塔は、東に塔、西に金堂を並置し、それを囲む配置となっています。今回の調査では、ほぼ確定した中門の南側で、南門とそれに取り付く築地塀の調査を行いました。この第6次調査では、北辺回廊基壇外側から南辺回廊基壇外側までの規模がほぼ200尺(0.297m/尺、唐尺)で設計されていることがわかり、すでに判明している回廊の東西規模201尺とあわせ、整然と計画された高麗寺の伽藍設計を知ることとなったのです。

ところが、今回の調査では、南門跡が想定していた伽藍中軸線上になく大きく西に偏ってほぼ金堂の正面に開かれていたことがわかりました。なお、調査区内では、南門東北隅の礎石を検出しており、築地塀との取り付け状況から、切妻造りで梁間2間(6尺×6尺)・桁行3間程度の八脚門と考えられますが、大棟の両妻には鴟尾を載せていたのです。他には、南辺築地を南門取り付け部から東へ約35m分確認し、中門東側から続く大規模な

暗渠も検出しています。

3. 調査成果のまとめと課題

本来、伽藍の南側正面にある南門は、他の四周にある東・西・北門が「僧門」と呼ばれるのに対し、中門とともに「仏門」とされ、特別な扱いを受けています。しかし、奈良時代になって中門よりも重視されるまでは比較的小規模なものが多く、梁間2間・桁行3間の切妻造りの八脚門が多いようです。今回検出した門跡も、原位置を保つ礎石の規模からして比較的小規模なものが予想されます。

ただし、今回の調査地では、7世紀後半の伽藍整備期の境内面を8世紀後半段階で造成し嵩上げしており、検出した門跡もこの段階のものですが、この遺構以外の調査区内すべてで伽藍整備期の築地塀が連続して遺存しているため、同所で南門の建替えがなされたと考えられます。つまり、塔・金堂・講堂等の中心伽藍が整備された当初から、南門は伽藍中軸線上にはなかったと考えざるを得ないのです。だとしたら、高麗寺の南門は、伽藍整備当初から西に大きく偏った金堂の正面付近に計画されたこととなります。

自然地形に左右される山間部の寺院ならまだしも、なぜ、段丘の平坦地に造られた高麗寺において、非対称の伽藍設計がなされたのでしょうか。今後の調査での大きな課題です。

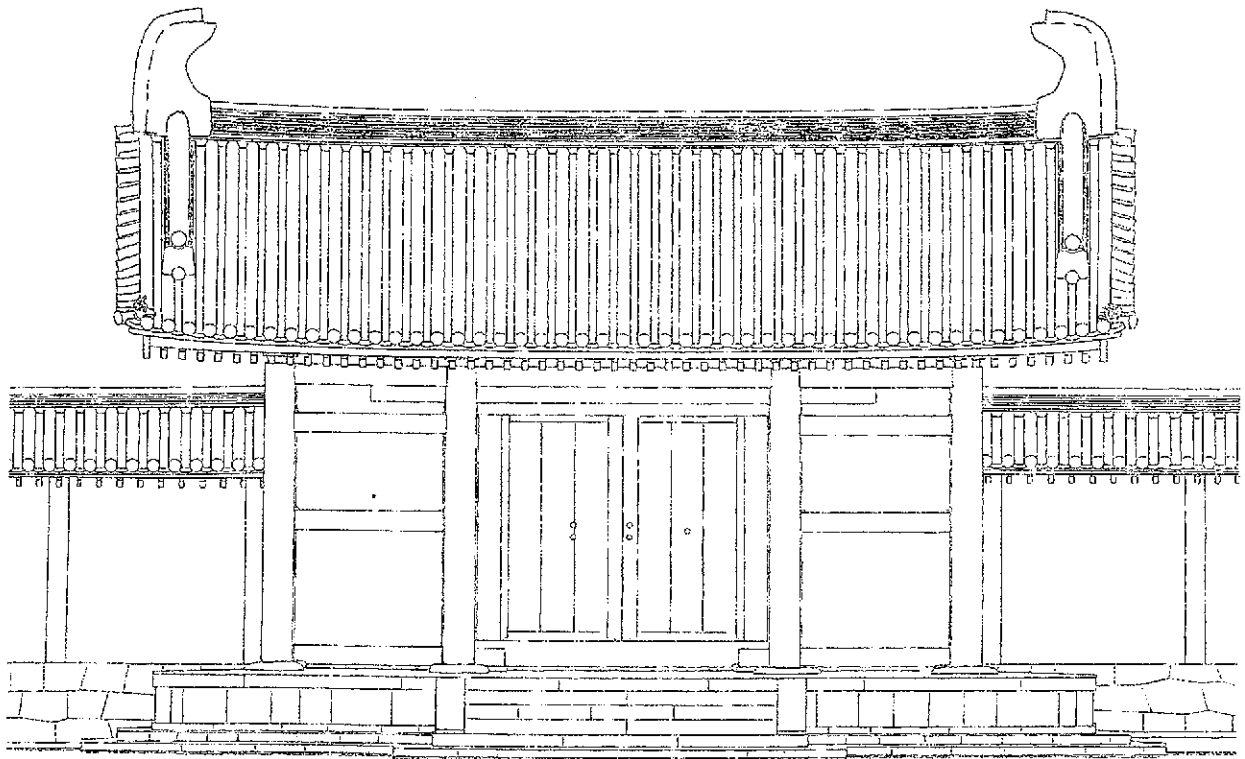
鴟尾を載せた壮麗な南門

今回出土した鴟尾は、南門の大棟から落下した状態で出土しており、南門に鴟尾を載せていたことは明らかです。古代寺院における過去の発掘調査例では、飛鳥寺（奈良県明日香村）西門所用の鴟尾が確認されており、他には同寺北門付近や松隈寺跡（奈良県明日香村）南門推定地付近で鴟尾の破片が出土した程度です。通常の古代寺院では、より規模の大きな格の高い諸堂に鴟尾が用いられたと考えられ、規模の小さな南門の屋根に鴟尾を載せることは稀であったと考えられます。

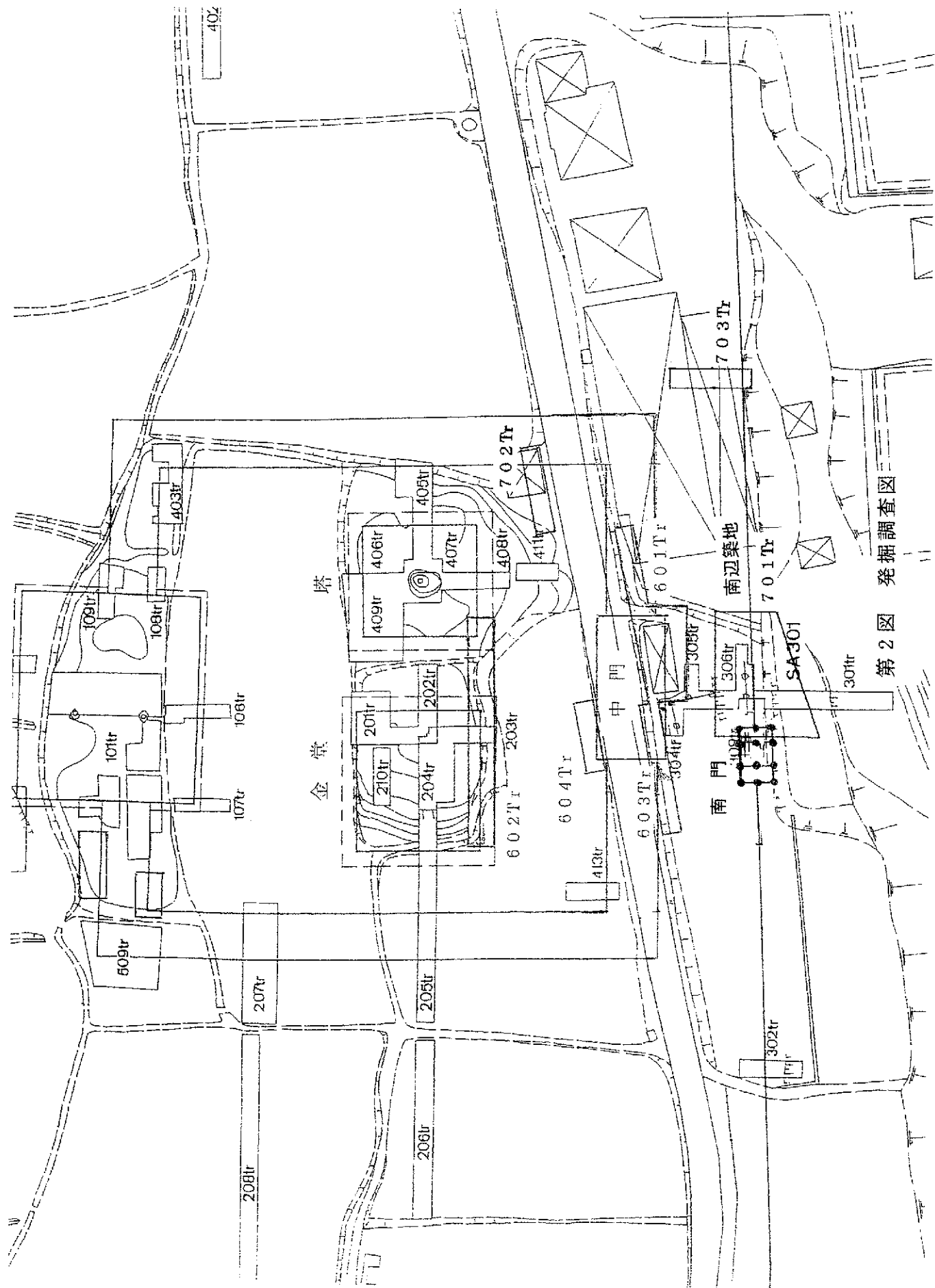
今回の調査では、南門所用の鴟尾として2種類の鴟尾を確認しています。ほぼ全体を復元することが可能な製品は、縦帯・鰭部にまったく装飾をもたず、表面が赤く焼かれたもので、大棟に取り付く方形透し孔や降り棟上端の丸瓦が差込まれる弧形透し孔があり、門の屋根構造を復元することが可能です。また、より古式の一例は、縦帯内郭の段型表現がみられ、伽藍整備当初から同所南門に鴟尾が用いられたと考えられます。鴟尾を載せた壮

麗な門をもつ高麗寺は、いかにも木津川からの正面観を重視した構造となっていたようです。しかも、今回の出土品は非常に残りが良く、ほぼ全体を復元することが可能です。南門所用の鴟尾として貴重な遺例となりました。

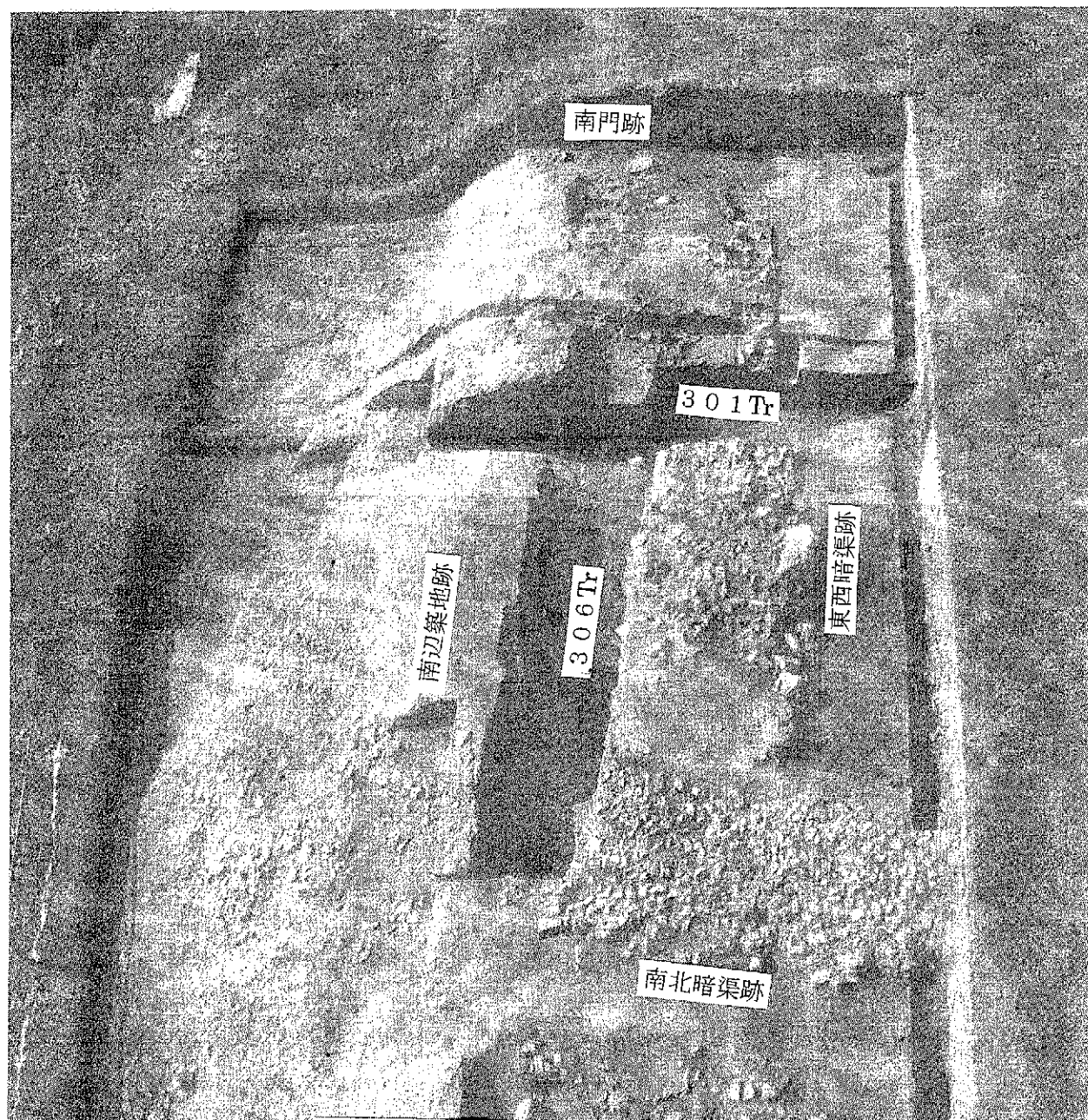
ひょっとして、高麗寺の南門が西に偏ることのヒントが、この鴟尾に隠されているのかも知れません。



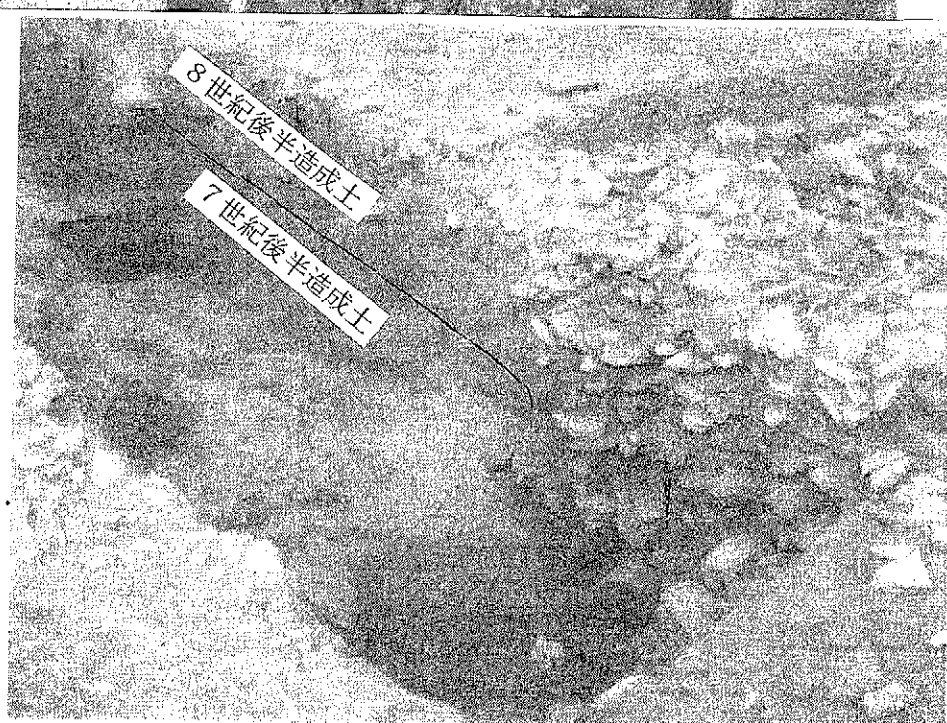
第1図 高麗寺南門のイメージ



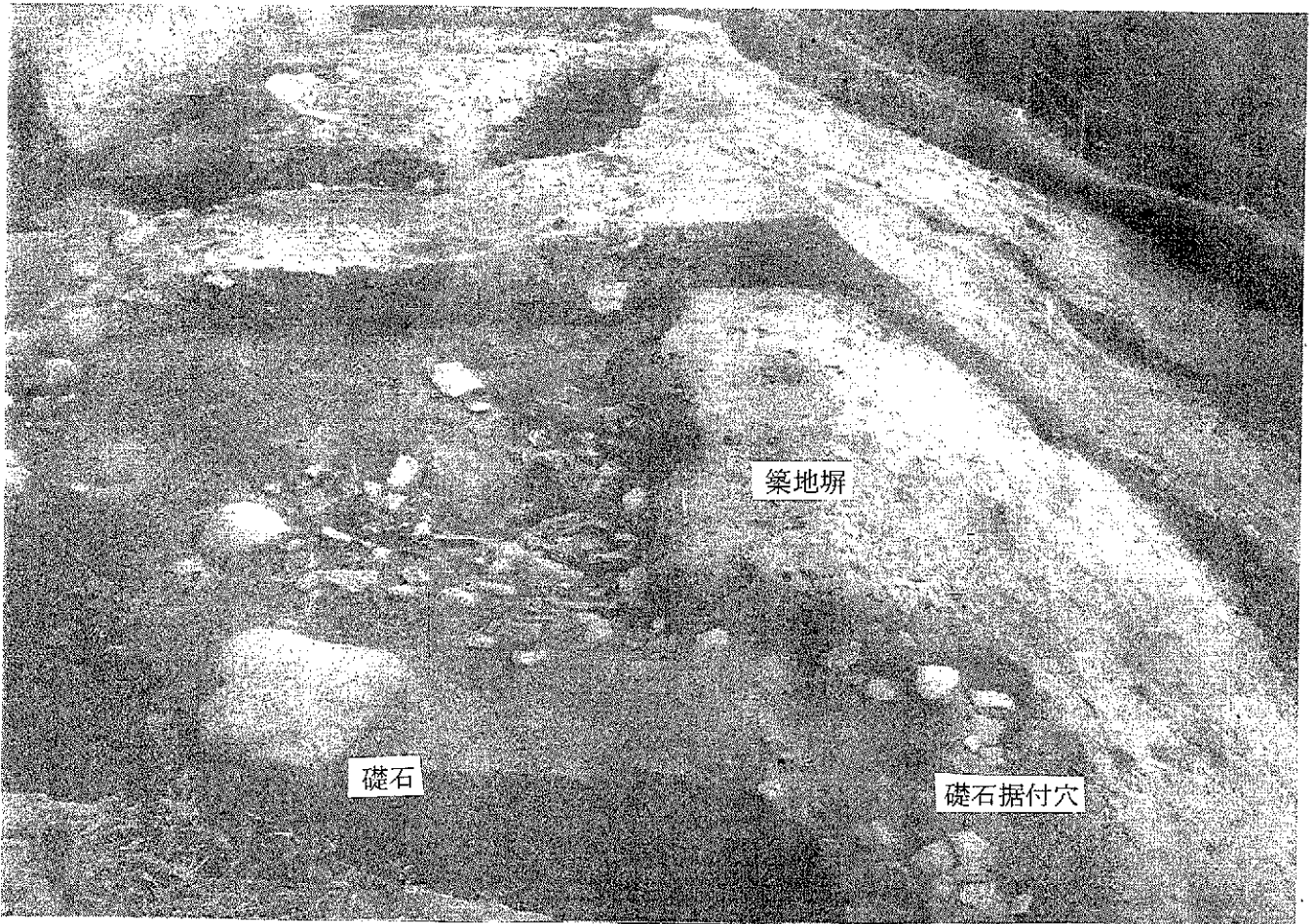
第2図 発掘調査図



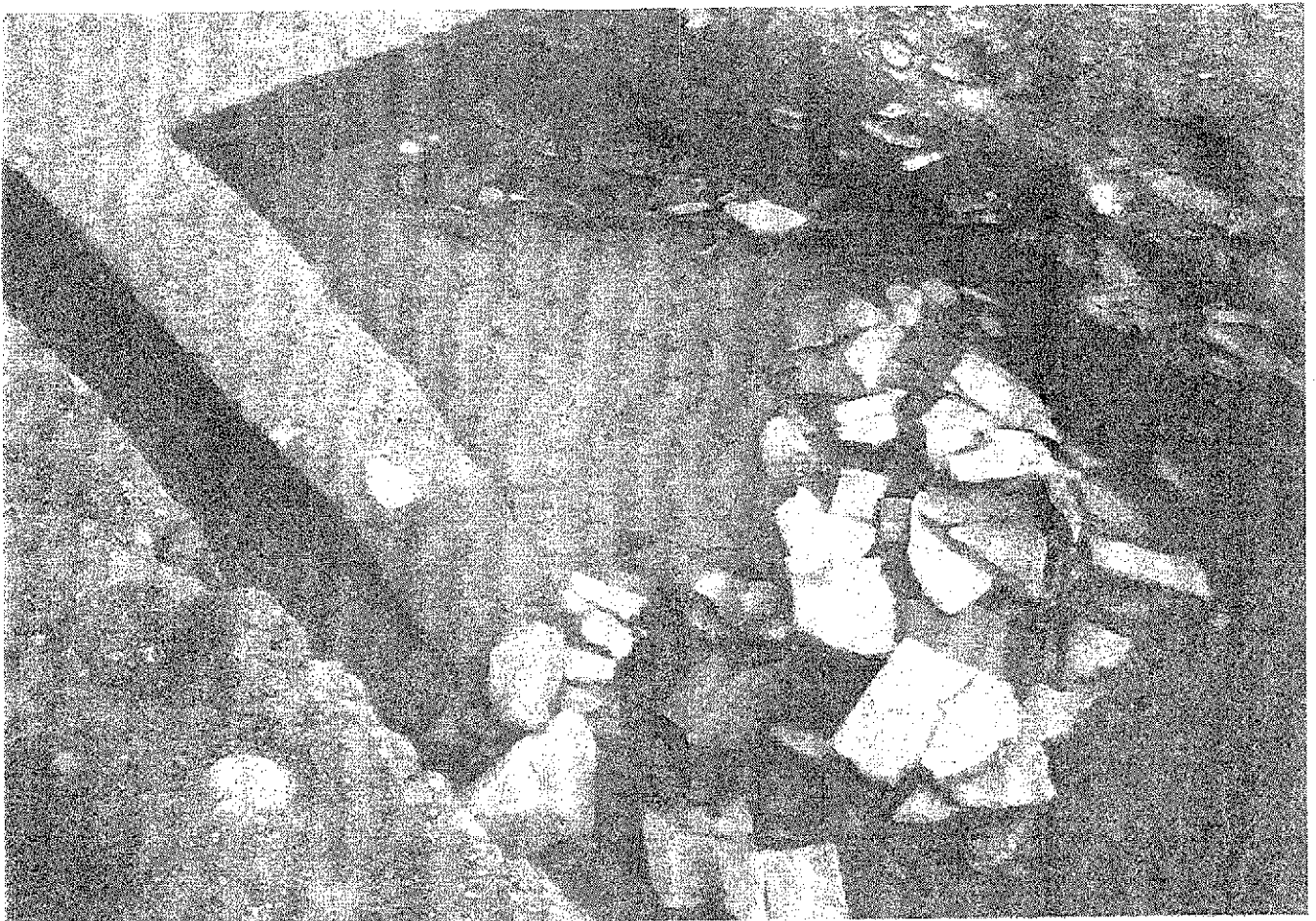
第3図 701Tr 前景
(上方が西)



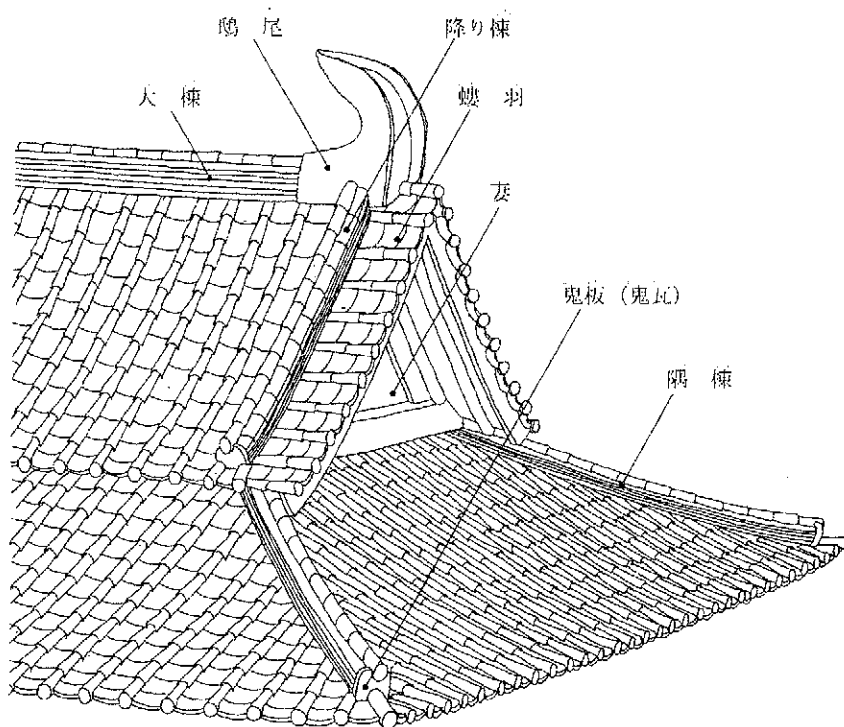
第4図 南北暗渠断面
(701Tr)



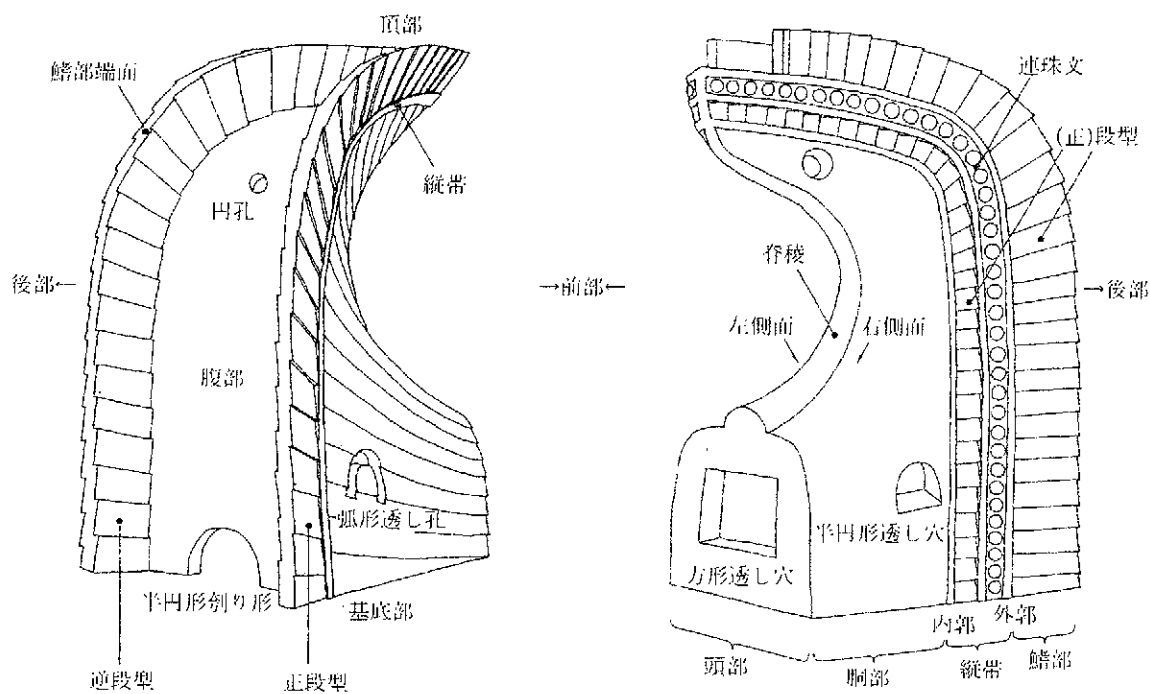
第5図 南門跡東側築地取付き部 (701Tr 西から)



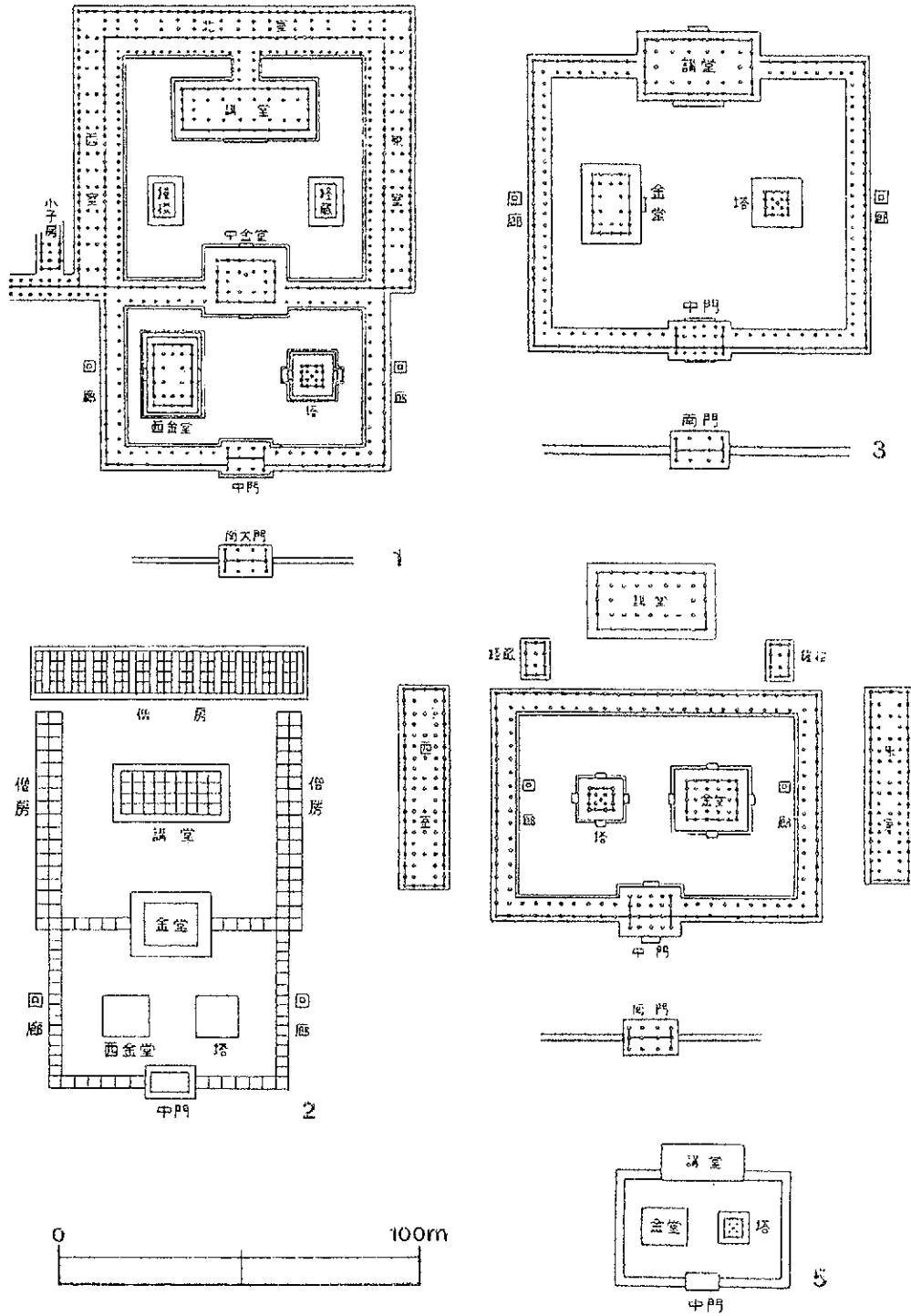
第6図 703Tr 築地瓦落 (南西から)



第7図 屋根の名称



第8図 鴟尾部分名称



第9図 伽藍配置各種

(1;川原寺 2;南滋賀廃寺 3;法隆寺 4;觀世音寺 5;法起寺)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどは、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189